

令和5年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」

令和5年度全国学力・学習状況調査の 英語の結果を活用した専門的な分析

最終報告

国立大学法人 横浜国立大学

研究代表者： 齊田智里

研究協力者： 鈴木雅之、高本真寛、大場貴志、西村秀之、登藤直弥

研究の目的

令和5年度全国学力・学習状況調査中学校英語調査問題の分析を行うとともに、その結果を生徒質問紙調査、学校質問紙調査、令和4年度英語教育実施状況調査、平成31年度全国学力・学習状況調査中学校英語、学校や教育委員会への訪問調査などに関連付けて多角的に分析を行うことで、中学校英語の現状と課題を明らかにし、改善への示唆を得ることを目的とする。

主な研究課題

1. 生徒の英語力の現状と課題についての分析
2. 平成31年度全国学力・学習状況調査の英語の結果との比較分析
3. 生徒の英語力・学習意欲と生徒要因の関係についての分析
4. 生徒の英語力・学習意欲と教師要因の関係についての分析
5. 生徒の英語力・学習意欲と学校・教育委員会の取組の関係についての分析
6. 社会経済的背景(SES)が低くても英語力が高い学校、教育委員会等の英語教育の取組についての調査

中学校英語の現状と課題

: 令和5年度全国学力・学習状況調査 中学校英語データ分析結果

0. データセットと調査問題の概要
 1. 得点分布(全領域、領域別、学校規模/地域規模/国公私/SES等)
 2. 問題別正答率、IT相関、無解答率等
 3. IRT分析
 4. 解答類型の分析
 5. 無解答率の分析
 6. 英語と他教科(国語、数学)との関係
 7. 英語力と諸変数との関係
 8. 令和4年度英語教育実施調査と英語力との関連
 9. H31中学校英語調査との比較
 10. マルチレベル分析による英語力と学習意欲に関連する要因の検討
 11. 学校SESと英語力との関係: 訪問調査(学校、教育委員会)
- 結論: 中学校英語改善への示唆

課題研究番号と目次との対応

研究課題1: 1、2、3、
4、5、6

研究課題2: 9

研究課題3: 7、10

研究課題4: 8、10

研究課題5: 11

研究課題6: 11

0 データセットと調査問題の概要

○ データセット

A	R5.4.18に「聞くこと・読むこと・書くこと・話すこと」を受験した中学3年生41,966人 (1回目で正常に全ての音声データが登録された者のみ) * 令和5年度『全国学力・学習状況調査』中学校英語「話すこと」調査テクニカルレポート
B	R5.4.18に「聞くこと・読むこと・書くこと」を受験した中学3年生923,981人

注) 令和5年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領: 英語「話すこと」の特例的な措置として、「期間内実施校」(データセットB)の英語「話すこと」の調査結果は参考値として公表は行わない」を受けて、「話すこと」の分析を含める場合はデータセットA、含めない場合はデータセットBを用いた。

○ 調査問題の概要(領域、評価の観点、問題形式)

領域	項目数	評価の観点	項目数	問題形式	項目数	採点方式
聞くこと	6	知識・技能	3	選択式	3	正誤(正答・誤答)
		思考・判断・表現	3	選択式	3	正誤(正答・誤答)
読むこと	6	知識・技能	3	選択式	3	正誤(正答・誤答)
		思考・判断・表現	3	選択式	3	正誤(正答・誤答)
書くこと	5	知識・技能	3	短答式	3	段階(正答・準正答・誤答)
		思考・判断・表現	2	記述式	2	段階(正答・準正答・誤答)
話すこと(やり取り)	4	知識・技能	3	短答式(口述)	3	段階(正答・準正答・誤答)
		思考・判断・表現	1	記述式(口述)	1	段階(正答・準正答・誤答)
話すこと(発表)	1	思考・判断・表現	1	記述式(口述)	1	段階(正答・準正答・誤答)

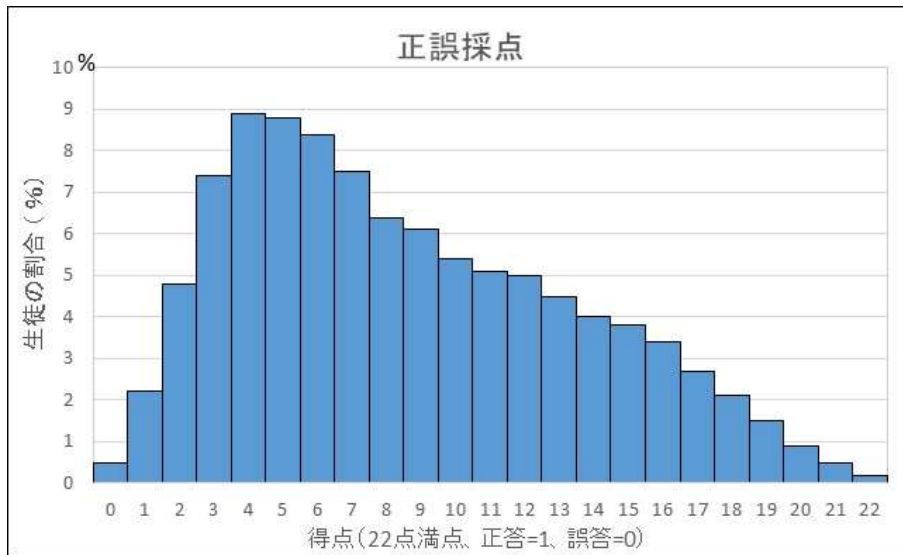
注) 中学校学習指導要領(平成29年告示)に示された外国語科(英語)の目標及び内容に基づいて作成されている。(国立教育政策研究所『解説資料』)

1.1 得点分布(全領域)

(データセットA:「話すこと」4月18日当日受験の41,966名を対象)

正誤採点(正答1、誤答0)による
度数分布図(22点満点)

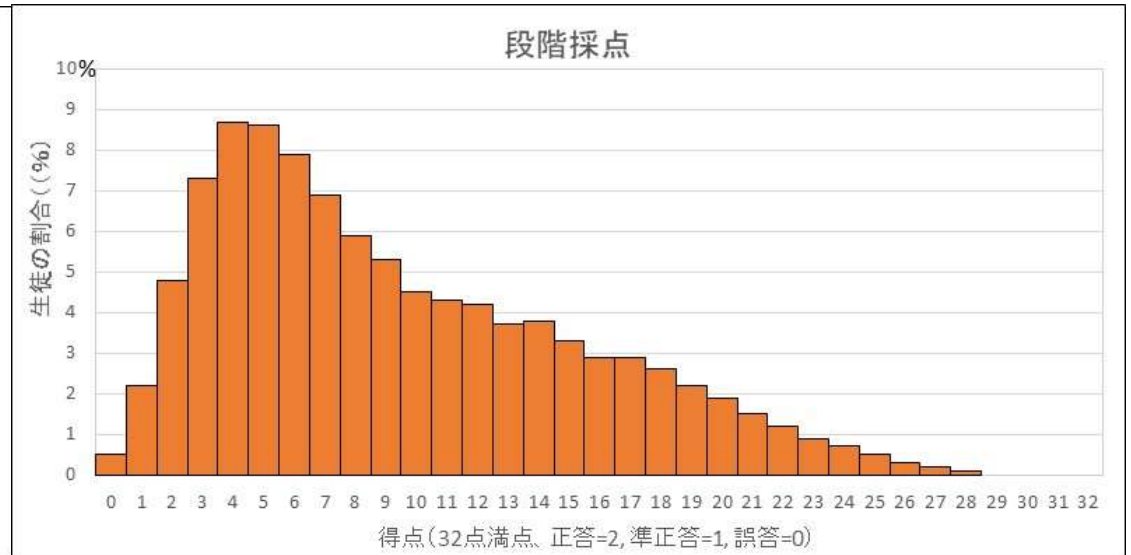
(横軸:得点、縦軸:生徒の割合)



平均得点	平均得点率(%)	中央値	標準偏差	最頻値
8.6	39.2	8	4.9	4
最小値	最大値	歪度	尖度	α 係数
0	22	0.50	-0.65	.86

段階採点(正答2、準正答1、誤答0)による
度数分布図(32点満点)

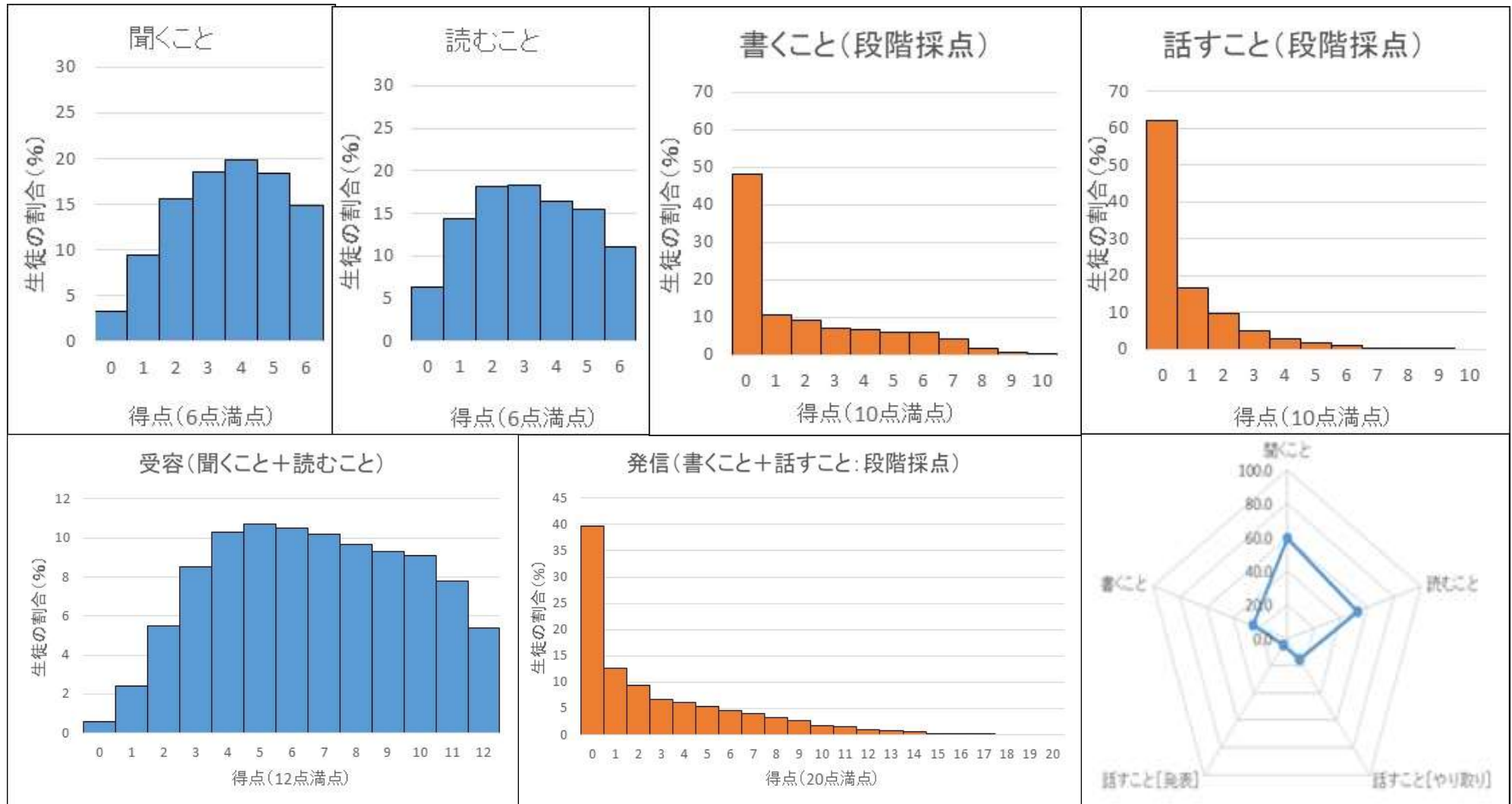
(横軸:得点、縦軸:生徒の割合)



平均得点	平均得点率(%)	中央値	標準偏差	最頻値
9.4	29.5	8	5.9	4
最小値	最大値	歪度	尖度	α 係数
0	31	0.72	-0.30	.87

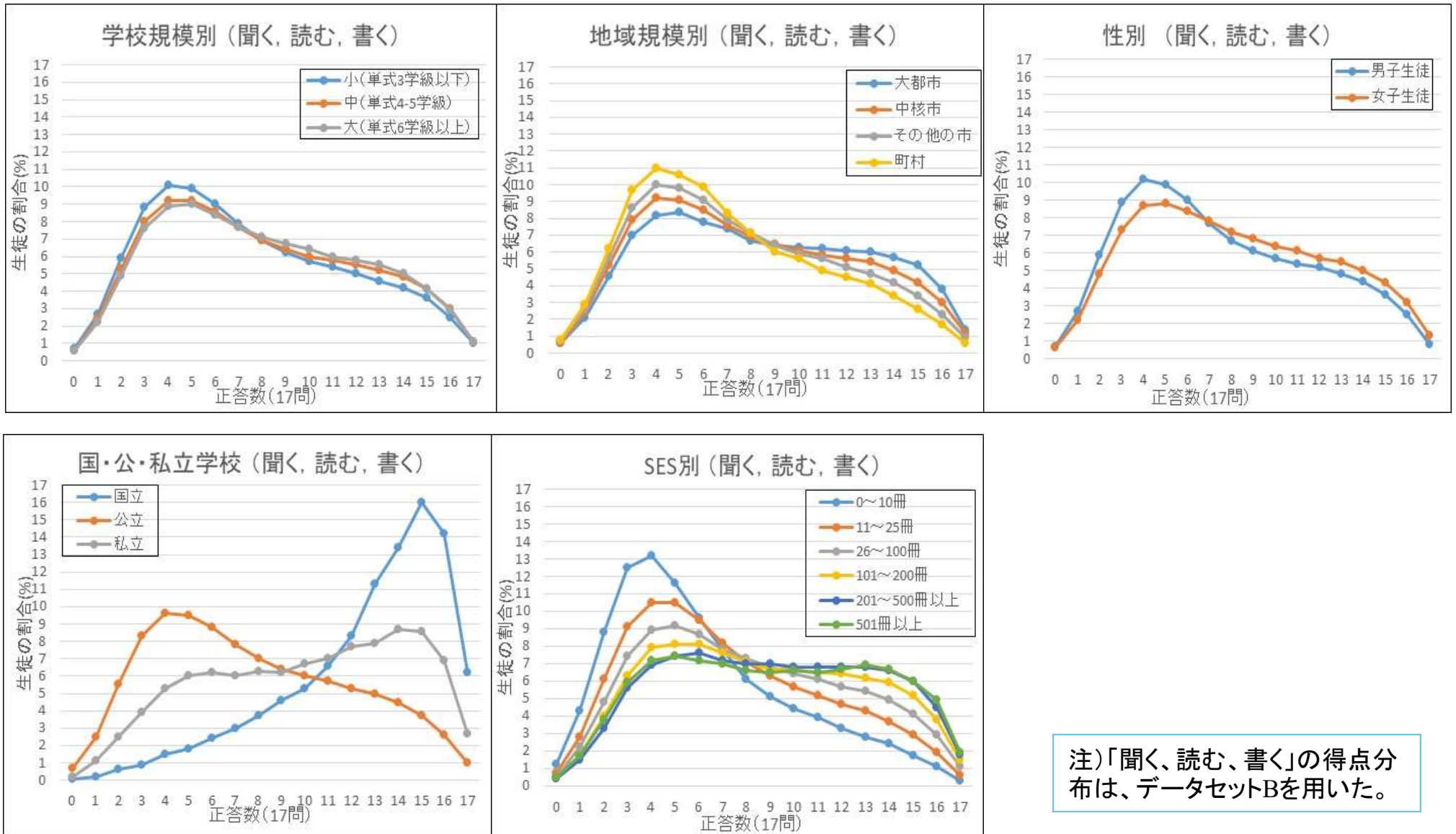
計22問(聞く・読む・書く・話す)を正誤(1、0)採点による度数分布図(左)と、短答式・記述式10問に対する正答・準正答・誤答(2、1、0)の段階採点による度数分布図(右)。『報告書』では、正答と準正答をあわせて正答として集計結果を提示。どちらの分布も低得点の生徒の割合が高いが、その傾向は段階採点で顕著。平均得点率は、正誤採点39%、段階採点30%、正答が困難な設問。段階採点では最大値31。テストの信頼性は高い。

1.2 得点分布(領域別)、5領域のバランス (横軸：得点、縦軸：生徒の割合(%))



「聞くこと」はやや高得点側に、「読むこと」は左右均等に得点分布。「書くこと」と「話すこと」は0点の生徒の割合が最も高く、歪んだ分布。「受容技能(聞く、読む)」と「発信技能(書く、話す)」の得点分布の形が大きく異なる。英語5領域のバランスがとれていない。自分の考えや気持ちを表現する、発信技能の向上がこれからの課題。

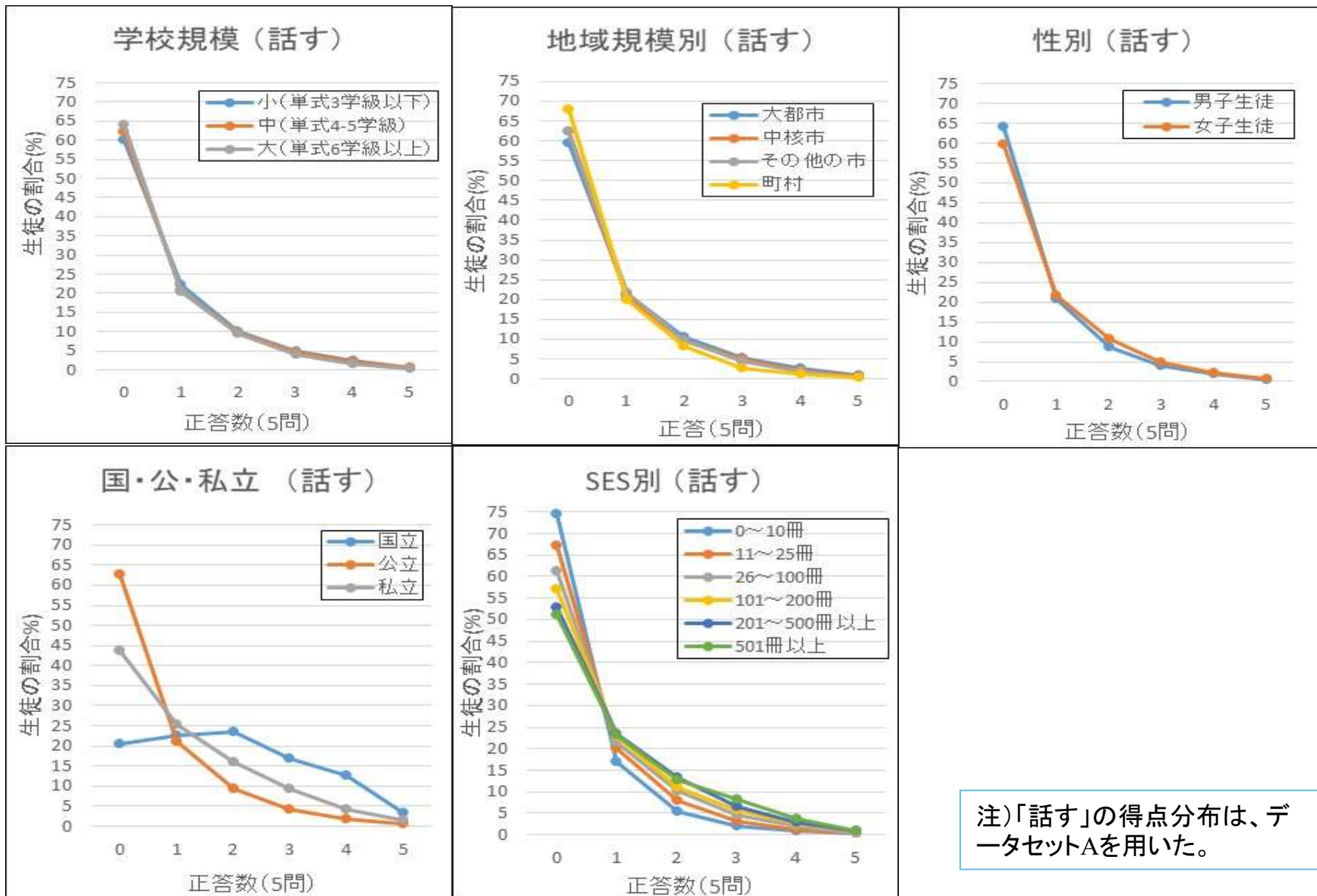
1.3 得点分布 (筆記:聞くこと+読むこと+書くこと) (学校規模別、地域規模別、性別、国・公・私立学校別、SES別)



注)「聞く、読む、書く」の得点分布は、データセットBを用いた。

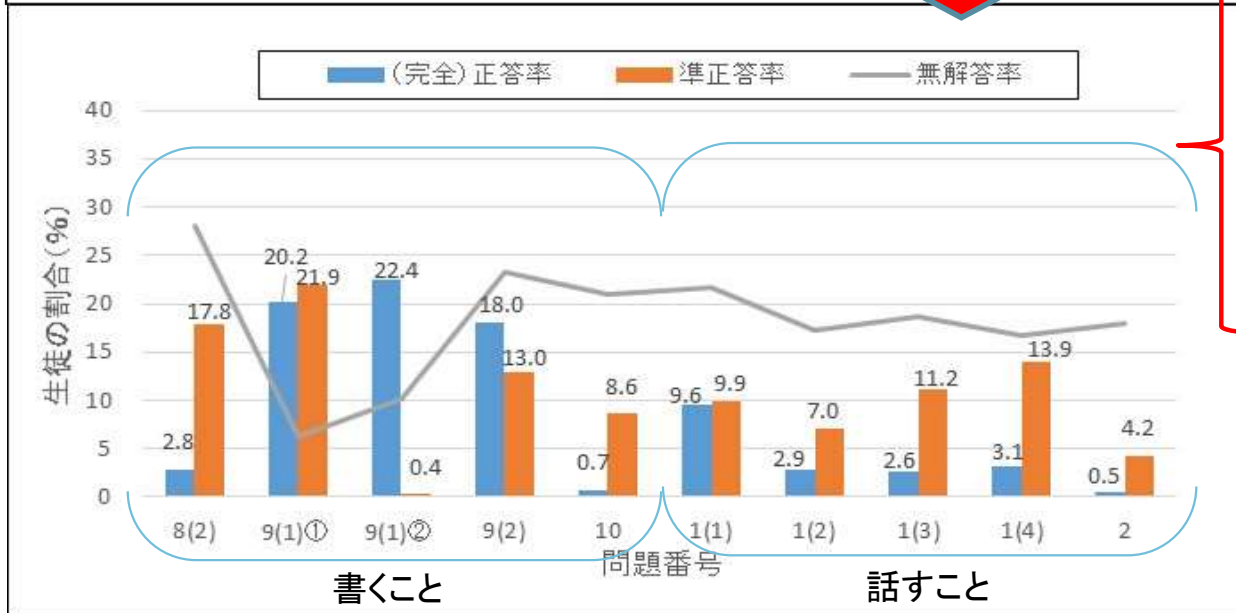
1.4 得点分布(口述:話すこと)

(学校規模別、地域規模別、性別、国・公・私立学校別、SES別)



注)「話す」の得点分布は、データセットAを用いた。

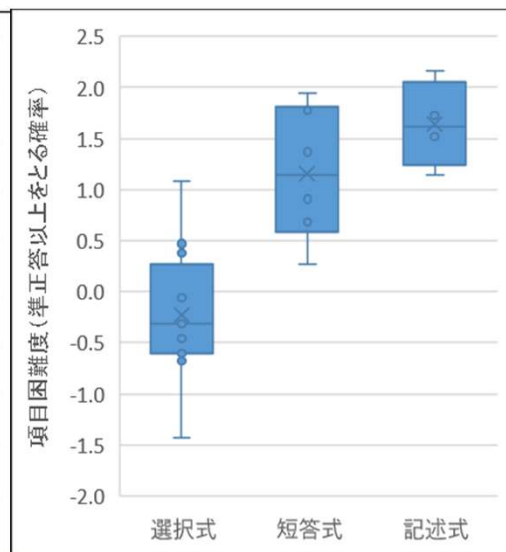
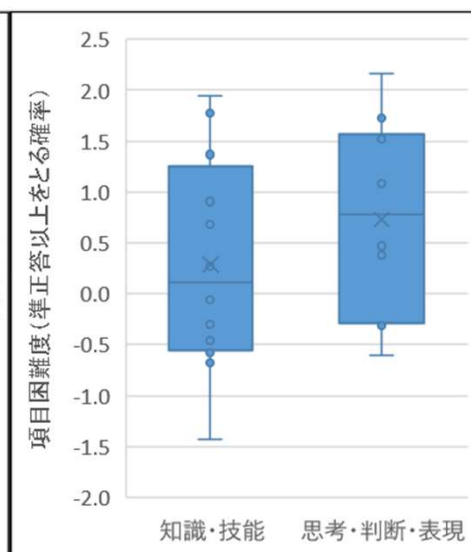
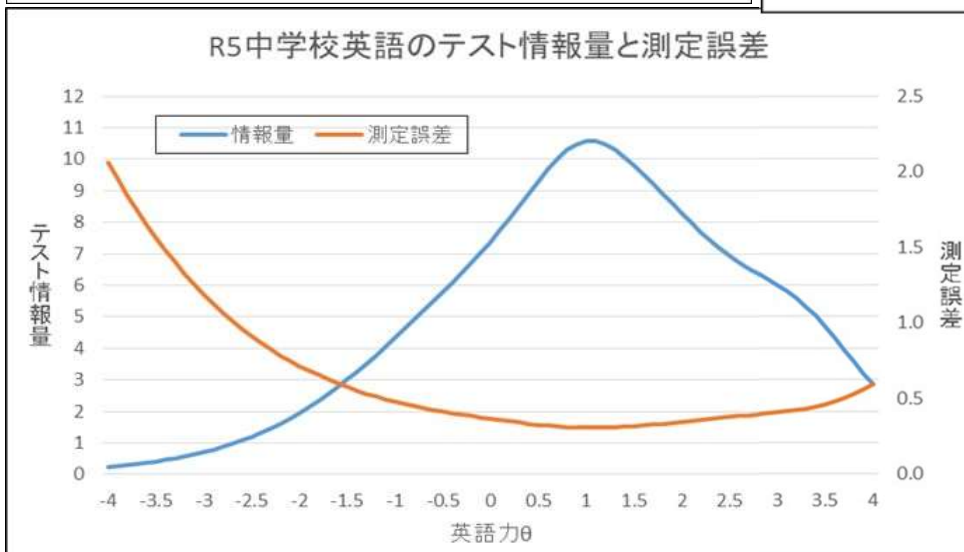
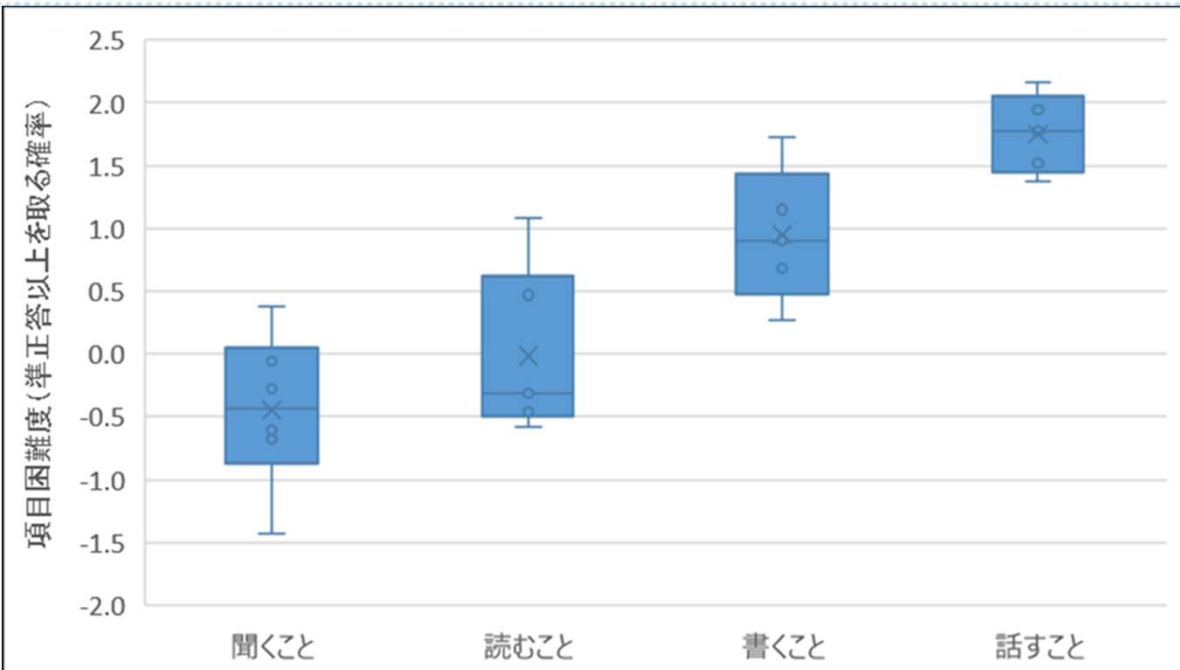
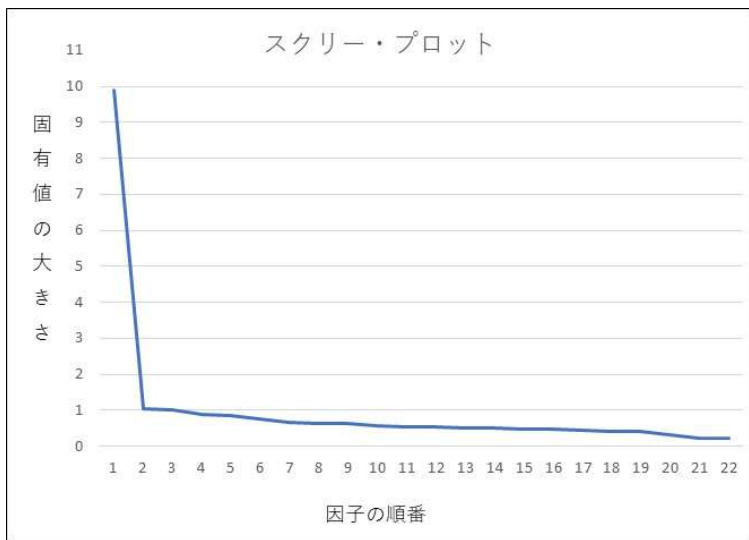
2 問題別正答率と無解答率



問題番号	学習指導要領の領域	評価の観点	問題形式
1(1)	聞く	知・技	選択式
1(2)	聞く	知・技	選択式
1(3)	聞く	知・技	選択式
2	聞く	思・判・表	選択式
3	聞く	思・判・表	選択式
4	聞く	思・判・表	選択式
5(1)	読む	知・技	選択式
5(2)	読む	知・技	選択式
6	読む	思・判・表	選択式
7(1)	読む	知・技	選択式
7(2)	読む	思・判・表	選択式
8(1)	読む	思・判・表	選択式
8(2)	書く	思・判・表	記述式
9(1)①	書く	知・技	短答式
9(1)②	書く	知・技	短答式
9(2)	書く	知・技	短答式
10	書く	思・判・表	記述式
1(1)	話す[やり取り]	知・技	短答式
1(2)	話す[やり取り]	知・技	短答式
1(3)	話す[やり取り]	知・技	短答式
1(4)	話す[やり取り]	思・判・表	記述式
2	話す[発表]	思・判・表	記述式

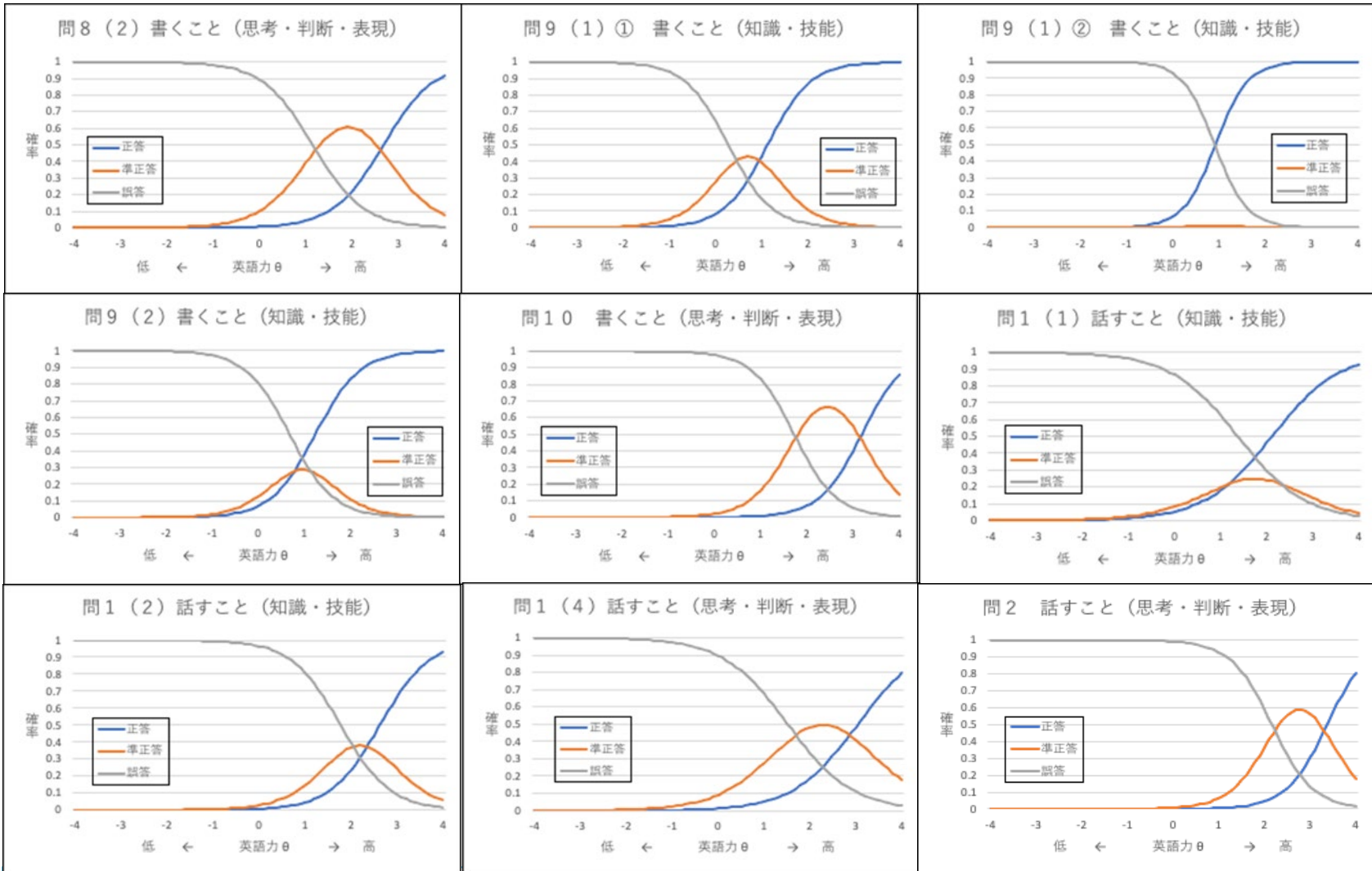
- ・「聞くこと」「読むこと」の問題の正答率に比べて「書くこと(特に思考・判断・表現)」と「話すこと」の問題の正答率が低い。
- ・「話すこと」では、(完全)正答率(青色)が非常に低く、準正答率(橙色)も10%前後と低い
- ・短答式・記述式の無解答率は20%程度と高い

3.1 IRT分析



- ・令和5年度中学校英語調査(聞く、読む、書く、話す:22問)は、IRT適用の前提である次元性を十分満たしている。
- ・ θ が1(偏差値換算で60)の生徒の英語力が、高い精度で測定されている。低学力層の英語力の測定精度が低くなっている。
- ・話すことの問題が難しすぎて、中学生の学力(「話すこと」に関するもの)を正確に把握することが難しくなっている。

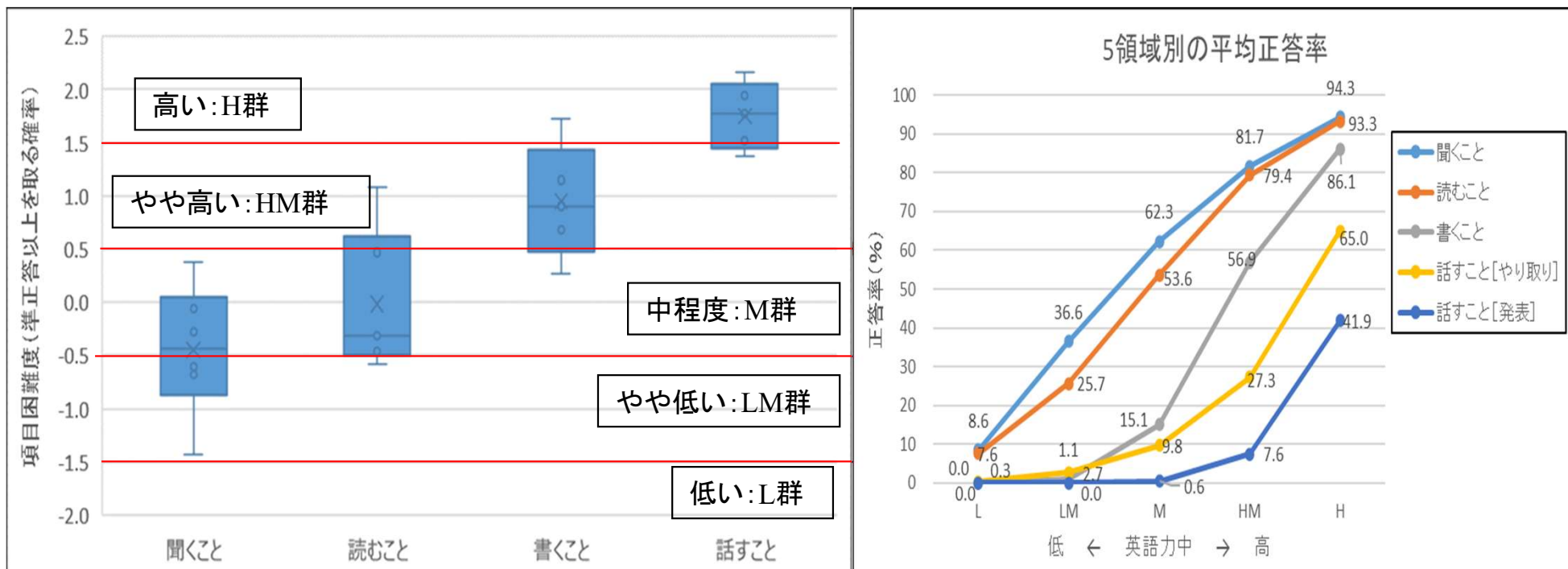
3.2 項目カテゴリー-応答曲線(書くこと・話すこと) (横軸:英語力、縦軸:確率)



グラフの読み方: その問題に50%の確率で正答または準正答するためには、縦軸の確率0.5(50%)と、正答または準正答の曲線が交わるころの横軸英語力θ(シートタ)が必要。横軸は英語力で、右に行くほど英語力は高く、左に行くほど低くなる。横軸のθ=0が平均的な英語力、θが1があると、偏差値が10上がるイメージ

- ・「書くこと」「話すこと」に50%の確率で準正答するためには、少なくともθが1以上(偏差値換算で60以上)の英語力が必要。
- ・「話すこと」に(完全)正答するには、θが3(偏差値換算で80)が必要であり、一般的な中学生の英語力の把握が難しい。

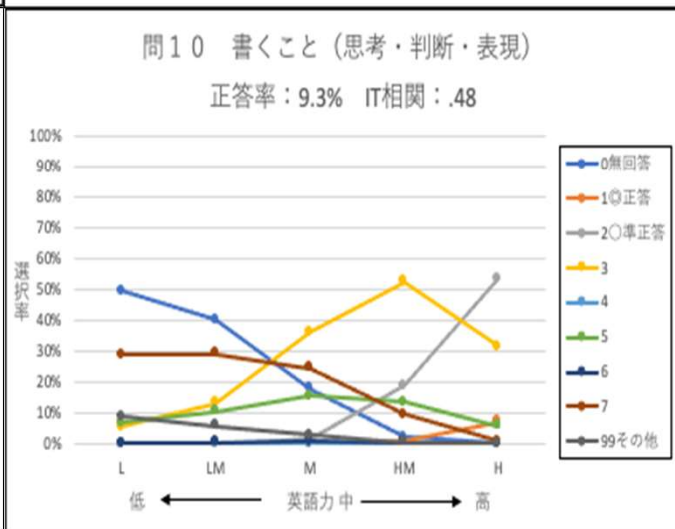
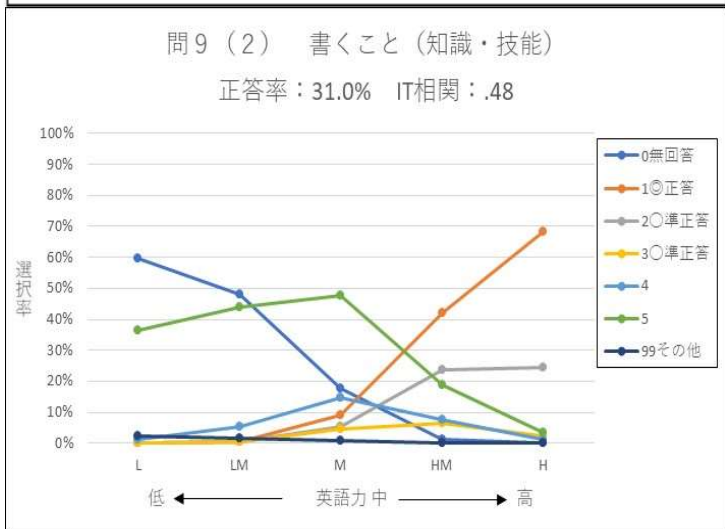
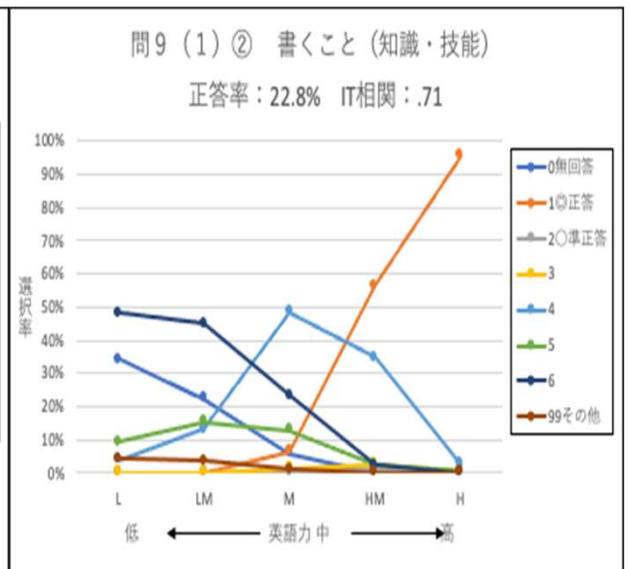
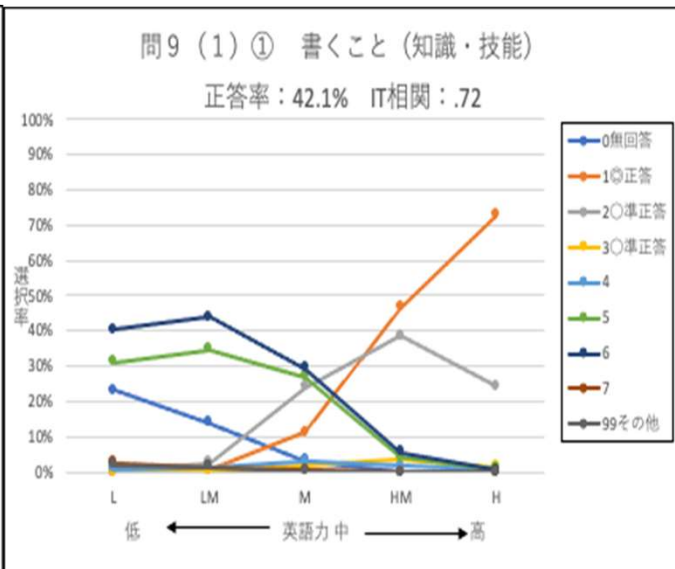
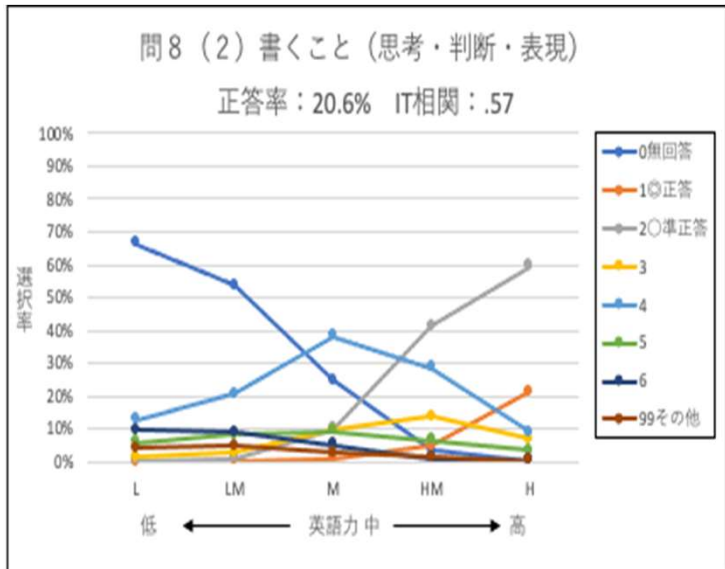
3.3 IRTスコア(英語力)と「英語でできること(Can-do)」との対応づけ



英語力	名称	生徒数	割合	IRTスコアの範囲	英語でできること(Can-do)
高い	H群	2,533	6%	65 ≤ IRTスコア	聞くこと、読むこと、書くことがほぼでき、話すこともある程度できる
やや高い	HM群	10,661	25%	55 ≤ IRTスコア < 65	聞くことと読むことはほぼでき、書くことは半分程度できる
中程度	M群	14,362	34%	45 ≤ IRTスコア < 55	聞くことはほぼできる、読むこと(概要・要点)は半分程度できる
やや低い	LM群	13,093	31%	35 ≤ IRTスコア < 45	聞くことが少しはできる
低い	L群	1,317	3%	IRTスコア < 35	英語でできることはほとんどない

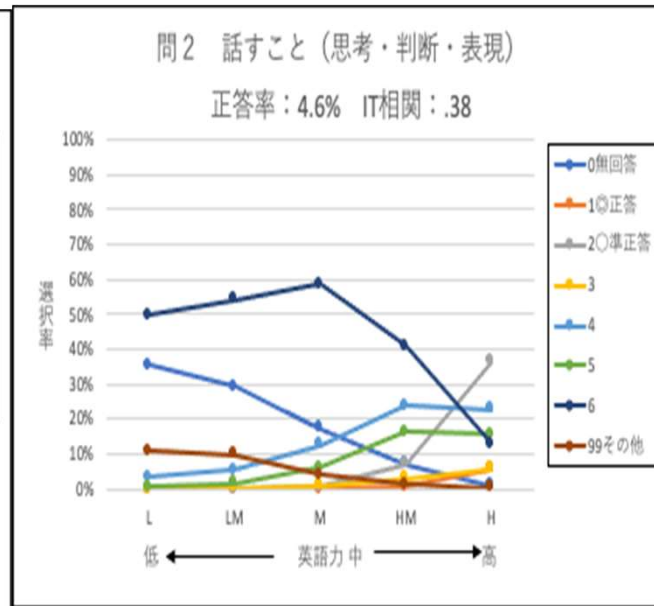
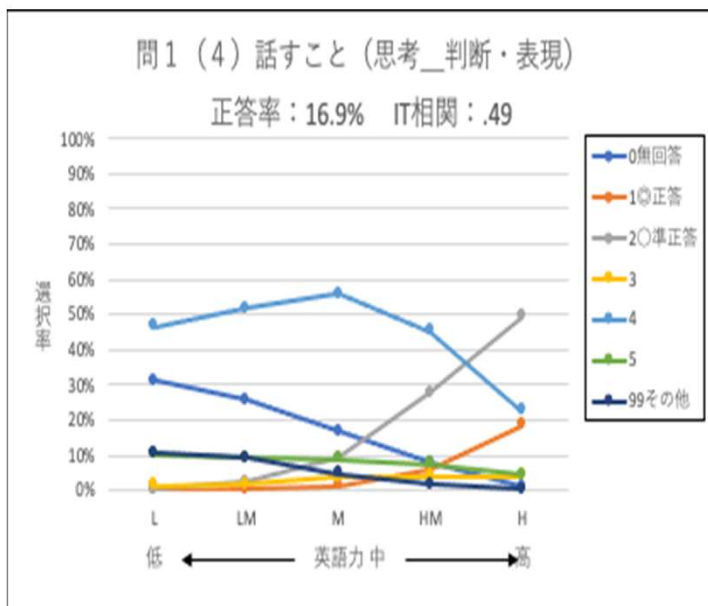
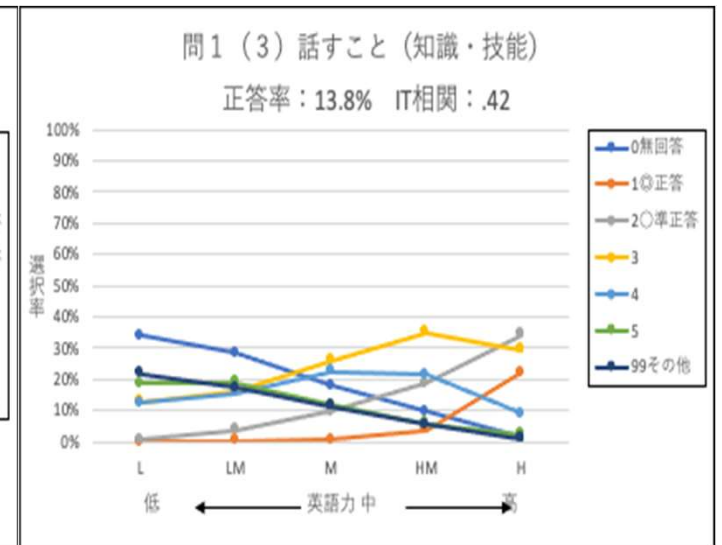
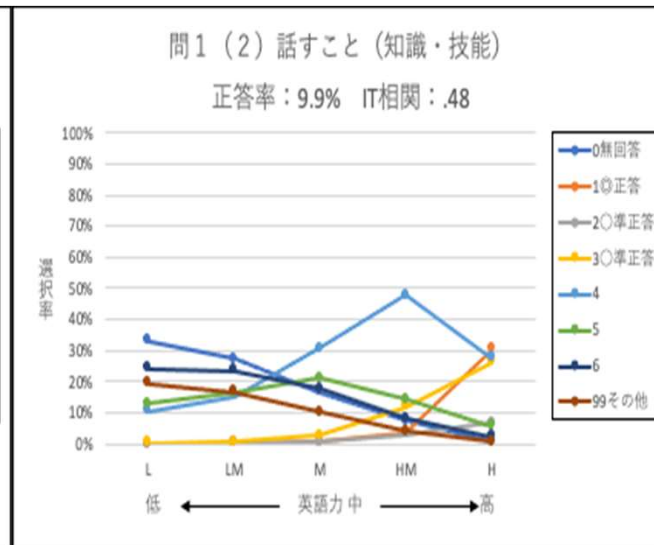
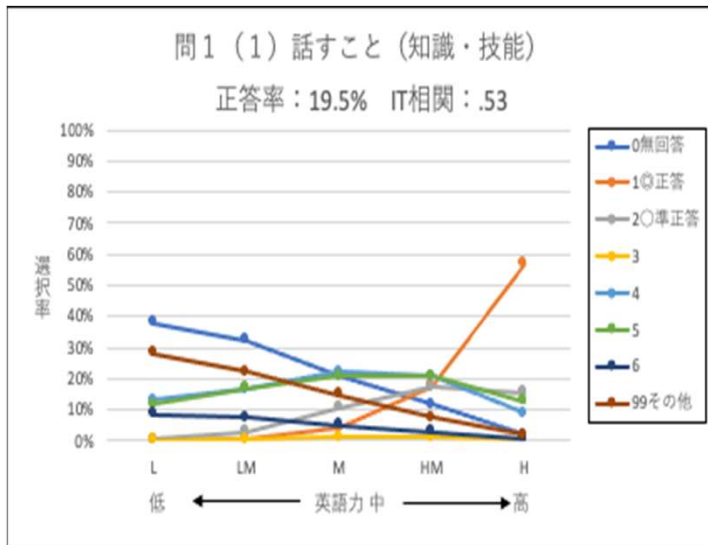
EasyEstimation(熊谷、2009)を用いて推定された θ を線形変換し、平均50、標準偏差10にしたものをこの報告書では「IRTスコア」と呼ぶことにする。これは古典的テスト理論でいうところの偏差値に対応するものと考えるとわかりやすい。IRTスコアを英語でできること(Can-do)と対応づけることで、教育機関等での調査結果の活用が容易になるように、IRTスコアの意味づけを行った。英語力を5群に分けて、質問紙調査との分析を行った。

4.1 解答類型の分析: 書くこと ◎(完全)正答、○準正答



- ・知識・技能の問題では、高学力層で正答率が高まっているが、中程度以下では正答率が非常に低い
- ・9(1)②は準正答率がどの英語力層でのほぼ0、学力の識別に役立っていない。
- ・思考・判断・表現の問題では、高学力層でも正答率が非常に低く、準正答の割合が最も高い
- ・低学力層では、正答率・準正答率ともに、ほぼ0である。
- ・誤答の解答類型では、意味は伝えられているものが多い。採点基準が厳しかった可能性がある。

4.2 解答類型の分析: 話すこと ◎(完全)正答、○準正答



- ・「話すこと」の知識・技能の問題で、正答率が高いのは、高学力層のみ。やや高学力層以下では、準正答の割合も非常に低い。
- ・思考・判断・表現の問題では、高学力層でも正答率が低く、準正答まで。中程度以下では、正答・準正答できていない。
- ・誤答の解答類型では、正確ではないが意味は正しく伝えられているものがある。
- ・「話すこと」の採点基準が、「書くこと」と同じでは厳しい。
- ・現行の3段階評価から、4段階評価にすることで、より正確に実態把握が可能。

5 無解答率の分析: 全体及び英語力層別

問題番号	領域	問題形式	正答率	無解答率 (%)					
				全体	英語力低	やや低	英語力中	やや高	英語力高
1(1)	聞く	選択式	80.1	0.1	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0
1(2)	聞く	選択式	65.5	0.2	2.8	0.2	0.1	0.0	0.0
1(3)	聞く	選択式	51.1	0.2	2.6	0.1	0.1	0.0	0.0
2	聞く	選択式	61.7	0.2	2.7	0.1	0.1	0.0	0.0
3	聞く	選択式	42.4	0.2	2.9	0.2	0.1	0.0	0.0
4	聞く	選択式	55.7	0.4	3.3	0.6	0.3	0.1	0.0
5(1)	読む	選択式	57.3	0.3	2.9	0.4	0.1	0.0	0.0
5(2)	読む	選択式	65.8	0.3	3.1	0.4	0.1	0.0	0.0
6	読む	選択式	37.8	0.2	3.1	0.3	0.1	0.0	0.0
7(1)	読む	選択式	60.7	0.3	3.3	0.4	0.1	0.0	0.0
7(2)	読む	選択式	35.3	0.7	4.1	1.0	0.6	0.2	0.1
8(1)	読む	選択式	57.4	0.8	4.5	1.1	0.5	0.3	0.2
8(2)	書く	記述式	20.6	28.1	66.4	53.7	24.6	3.2	0.1
9(1)①	書く	短答式	42.1	6.2	23.1	14.0	3.2	0.0	0.0
9(1)②	書く	短答式	22.8	10.1	34.2	22.3	5.9	0.1	0.0
9(2)	書く	短答式	31.0	23.3	59.8	48.0	17.8	1.2	0.0
10	書く	記述式	9.3	20.9	49.7	40.4	17.8	2.4	0.2
S1(1)	話す	短答式	19.5	21.7	37.8	32.3	21.3	11.7	2.0
S1(2)	話す	短答式	9.9	17.3	33.2	27.3	16.8	7.5	0.9
S1(3)	話す	短答式	13.8	18.6	34.0	28.3	17.9	9.6	1.8
S1(4)	話す	記述式	16.9	16.7	31.0	25.6	16.6	7.9	1.0
S2	話す	記述式	4.6	18.0	35.5	29.1	17.2	7.1	1.0
			生徒数	41,966	1,317	13,093	14,362	10,661	2,533

- ・英語力低層で、「話すこと」の問題に6~7割は何らかの発話をしている。話そうという意欲は大事。意味が正確に伝えられていれば部分点を与えることで、生徒の話す力をより正確に識別できる。
- ・英語力低層では「話すこと」より「書くこと」の無解答率が高い。特に「書くこと」の記述式の無解答率が非常に高い。
- ・英語力高層では「書くこと」より「話すこと」の無解答率が高い。
- ・英語力低層では、選択式問題でも無回答率が3%前後と高い。
- ・英語力高層では、「話すこと」の1問目の無解答率が2%と、高層の中では最も高い。他の英語力層でも「話すこと」の中で第1問の無解答率が最も高い。「話すこと」で何らかのオンライン操作の影響の可能性がある。

1% ≤ 無解答率 < 10%	10% ≤ 無解答率 < 20%	20% ≤ 無解答率 < 30%
30% ≤ 無解答率 < 40%	40% ≤ 無解答率 < 50%	50% ≤ 無解答率

6.1 英語と他教科(国語・数学)との関係: 領域間・無解答率

	英_聞くこと	英_読むこと	英_書くこと	英_話すこと
英_聞くこと	1			
英_読むこと	.56**	1		
英_書くこと	.57**	.66**	1	
英_話すこと	.45**	.47**	.56**	1
英_IRTスコア	.79**	.85**	.88**	.67**

	正答率_国		正答率_数	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
英_聞くこと	.50**	.57**		
英_読むこと	.55**	.63**		
英_書くこと	.53**	.65**		
英_話すこと	.37**	.45**		
英_IRTスコア	.63**	.73**		

正答率	
国語	数学
70.6	52.2
22.1	26.0

	国_話すこと・聞くこと	国_読むこと	国_書くこと
英_聞くこと	.30**	.43**	.38**
英_読むこと	.32**	.48**	.41**
英_書くこと	.29**	.45**	.40**
英_話すこと	.20**	.32**	.27**

	数_数と式	数_図形	数_関数	数_データの活用
英_聞くこと	.49**	.46**	.48**	.41**
英_読むこと	.54**	.52**	.53**	.45**
英_書くこと	.55**	.56**	.54**	.46**
英_話すこと	.37**	.40**	.37**	.31**

	国_知識・技能	数_知識・技能
英_知識・技能	.54**	.66**

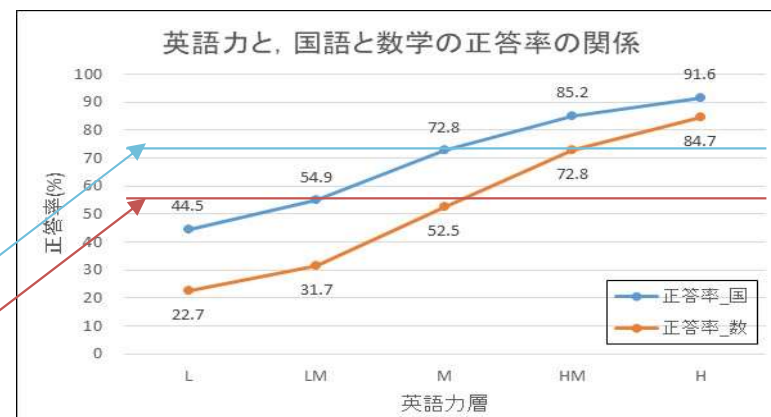
	国_思考・判断・表現	数_思考・判断・表現
英_思考・判断・表現	.50**	.58**

** 相関係数は 1% 水準
で有意 (両側)

■ .20<相関係数 ≤ .40、

■ .40<相関係数 ≤ .70

■ .70<相関係数

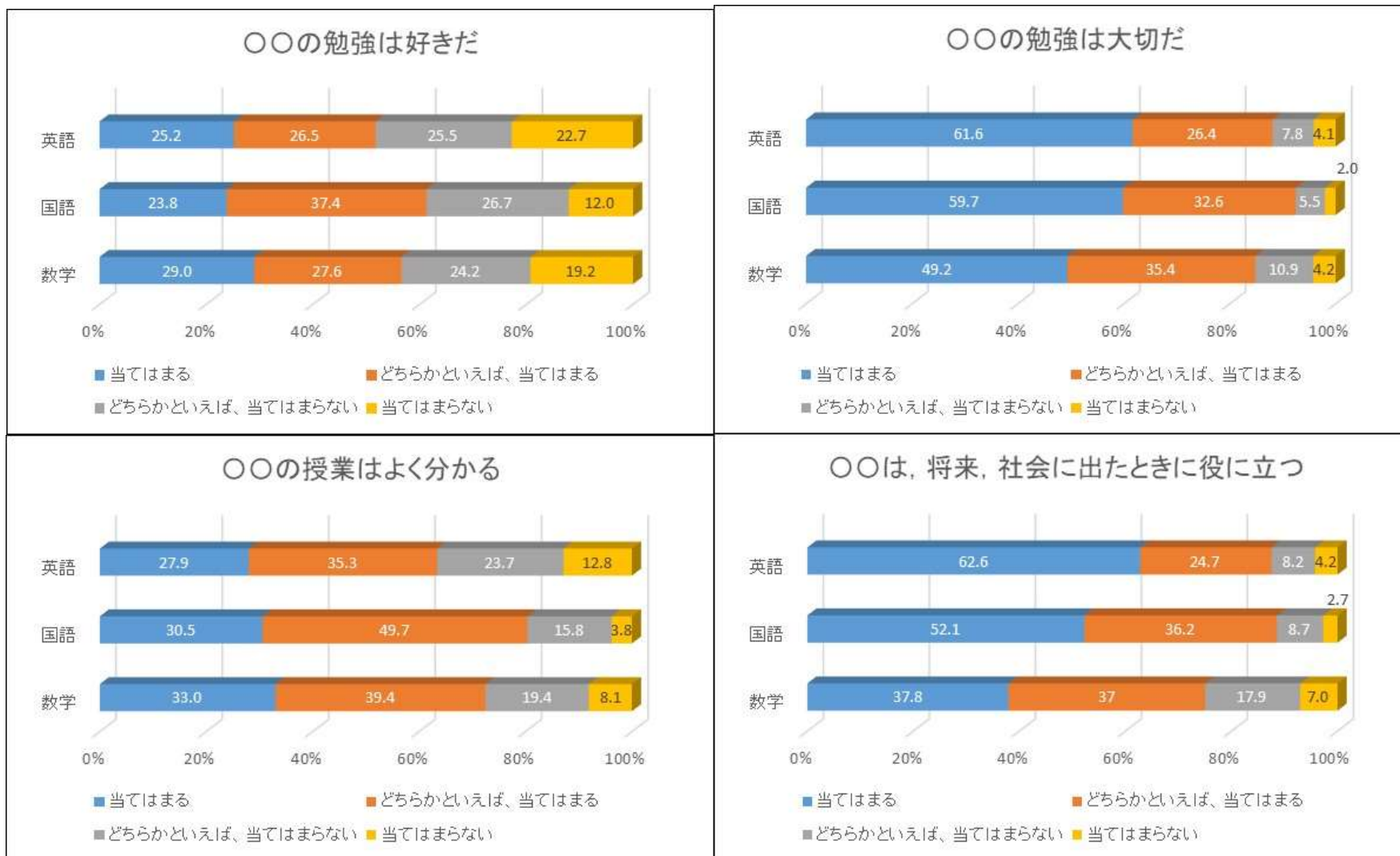


	問題数	平均値	標準偏差
国_無解答率_全体	15	4%	9%
数_無解答率_全体	15	9%	15%
英_無解答率_全体	22	8%	11%

	問題数	平均値	標準偏差
国_無解答率_記述式	4	11%	22%
数_無解答率_記述式	5	18%	28%
英_無解答率_記述式	4	21%	29%

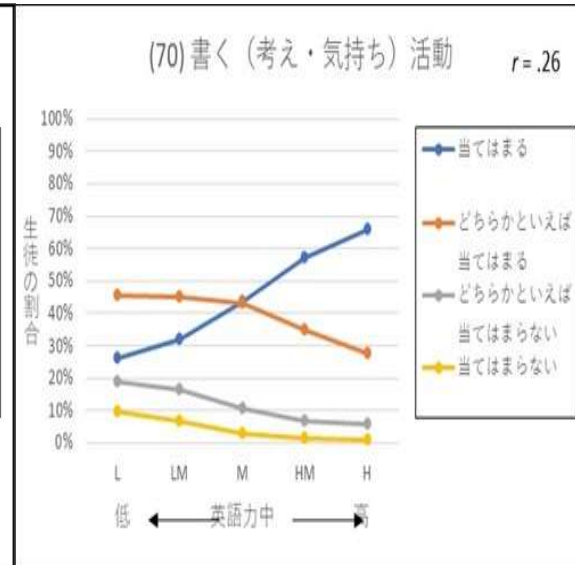
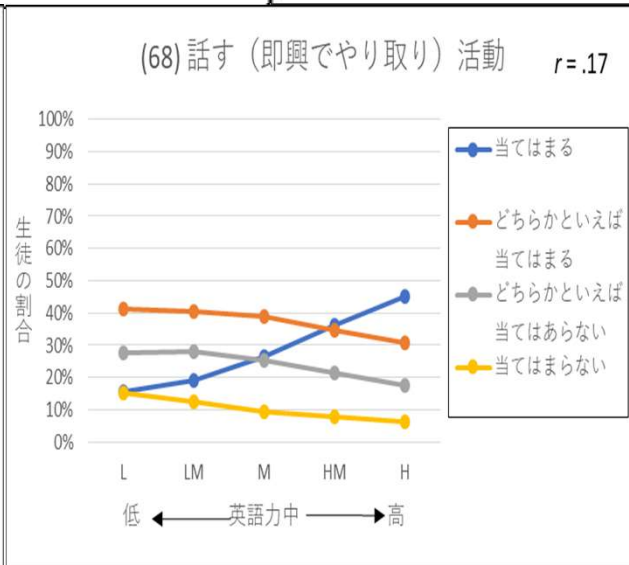
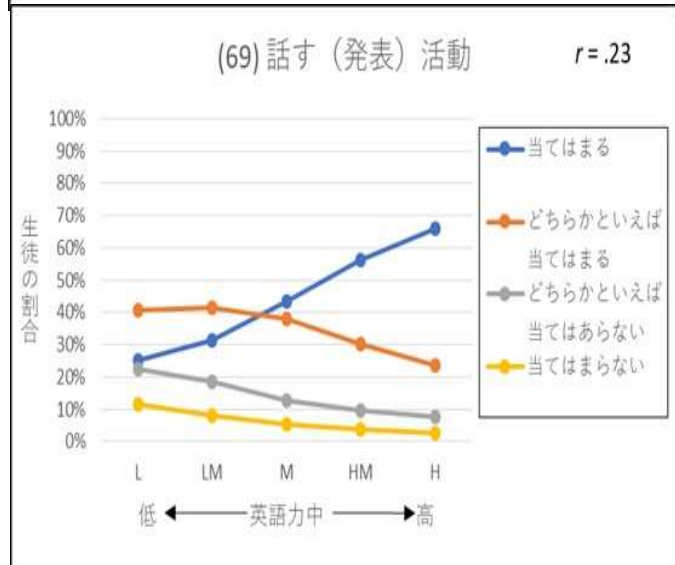
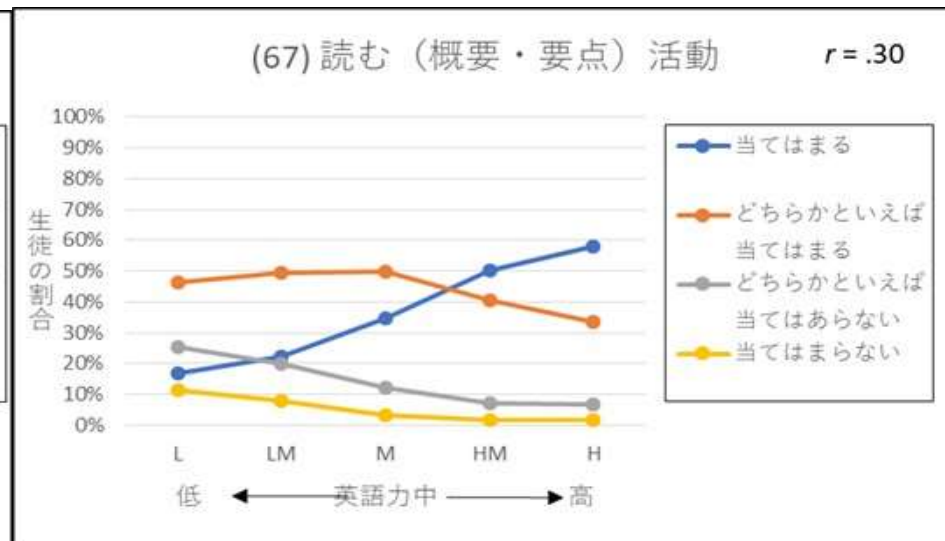
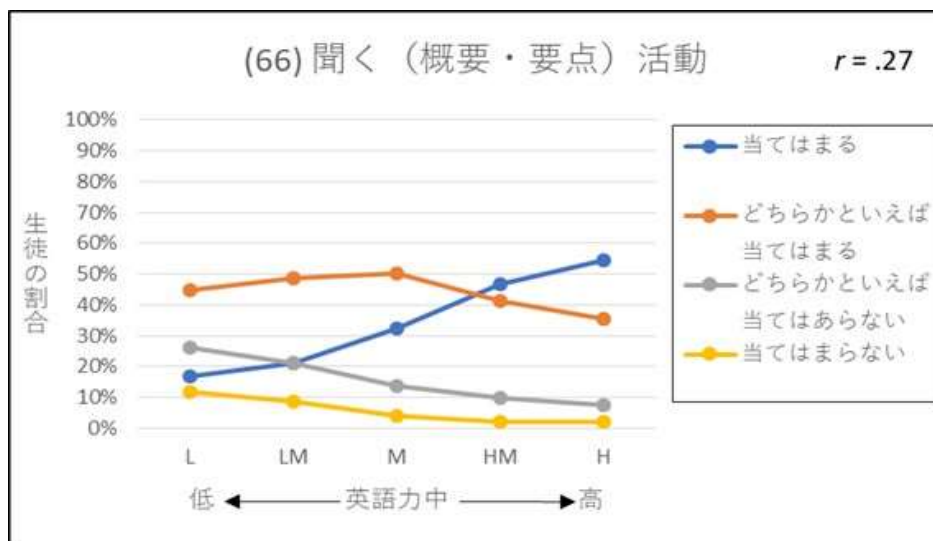
- ・英語の領域間では、「読むこと」と「書くこと」の関係が最も強い。
- ・英語は国語より数学との関係が強い。
- ・英語の「読むこと」が、国語のどの領域とも強い関係にある。
- ・英語の「書くこと」が、数学のどの領域とも強い関係にある。
- ・英語の記述式問題の無解答率は、国語や数学よりも高い。
- ・英語力が上がるにつれ、国語と数学の正答率の差が小さくなっている。

6.2 英語と他教科(国語・数学)との関係:学習への興味・関心等



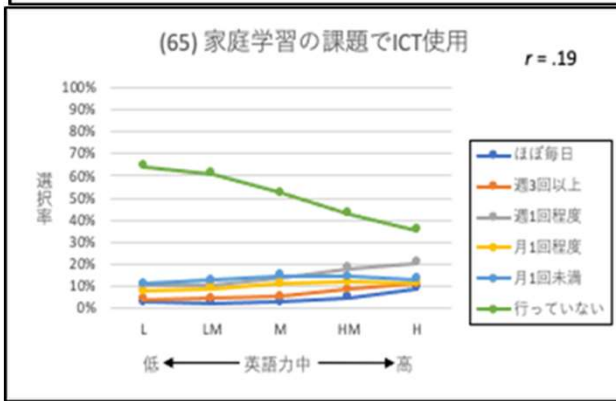
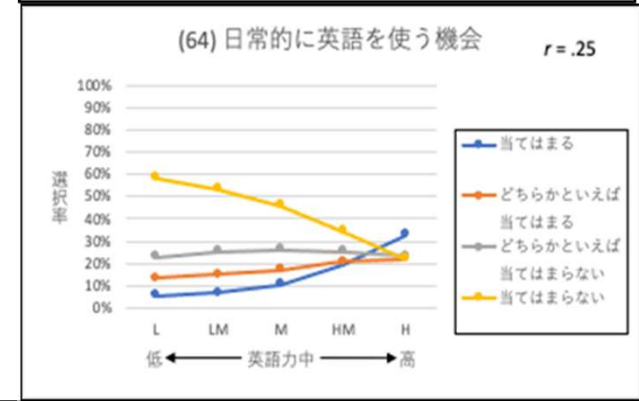
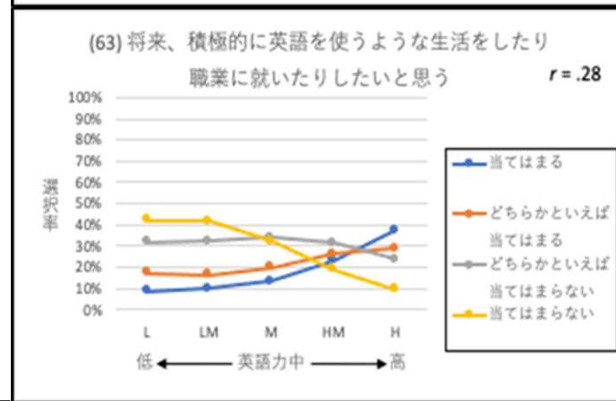
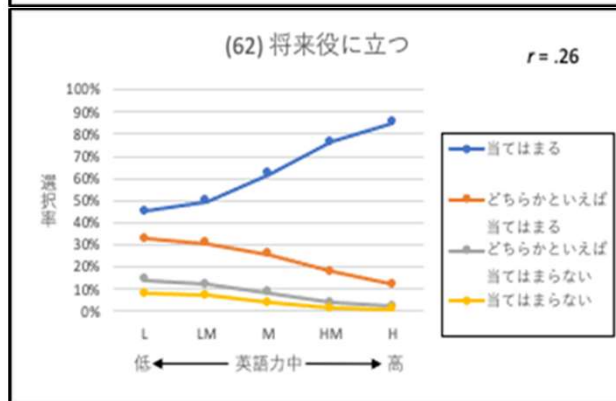
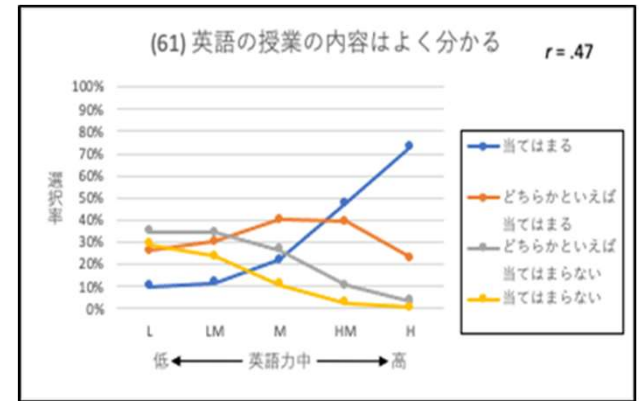
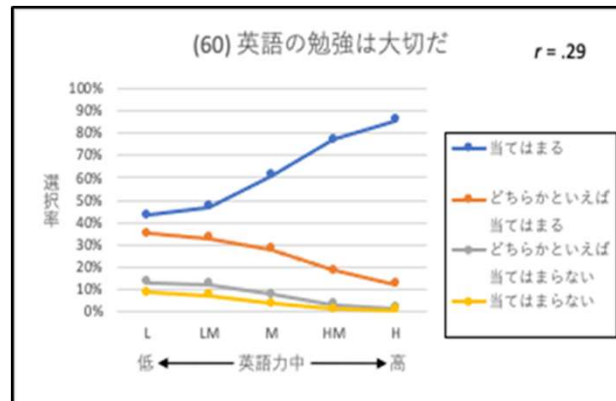
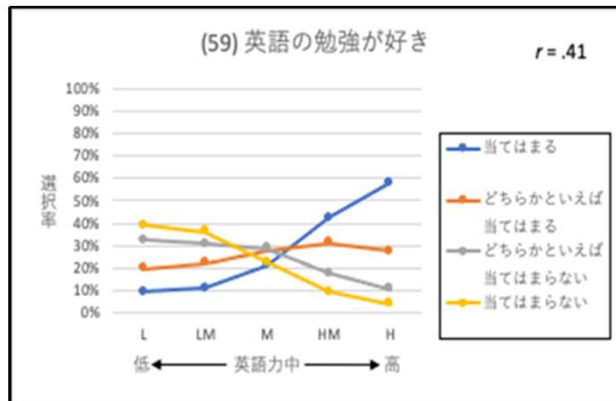
- ・「好き」の「当てはまる」及び「どちらかといえば、当てはまる」の選択率は、英語は数学・国語より低い。
- ・「よく分かる」の「当てはまる」の選択率は、英語は数学・国語より低い。
- ・「大切」と「役に立つ」の「当てはまる」の選択率は、英語は数学・国語より高い。

7.1 英語力と諸変数との関係：英語の言語活動



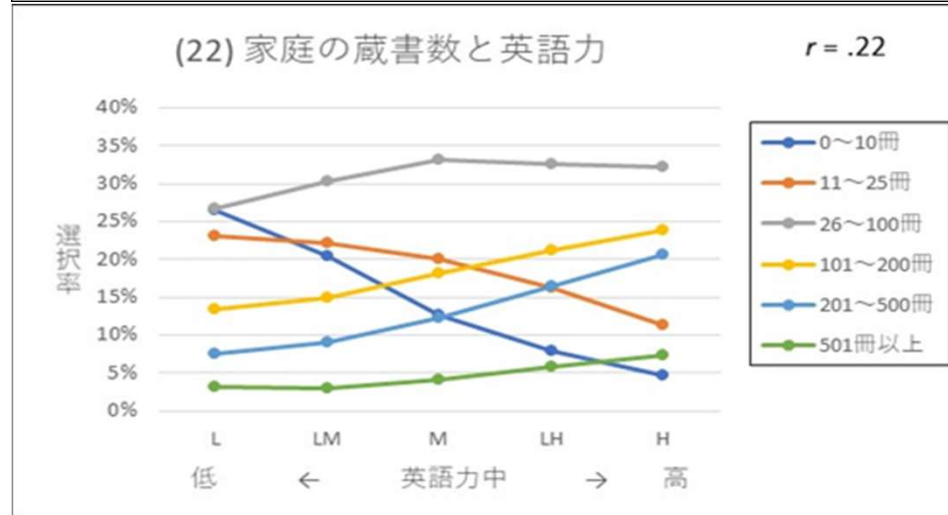
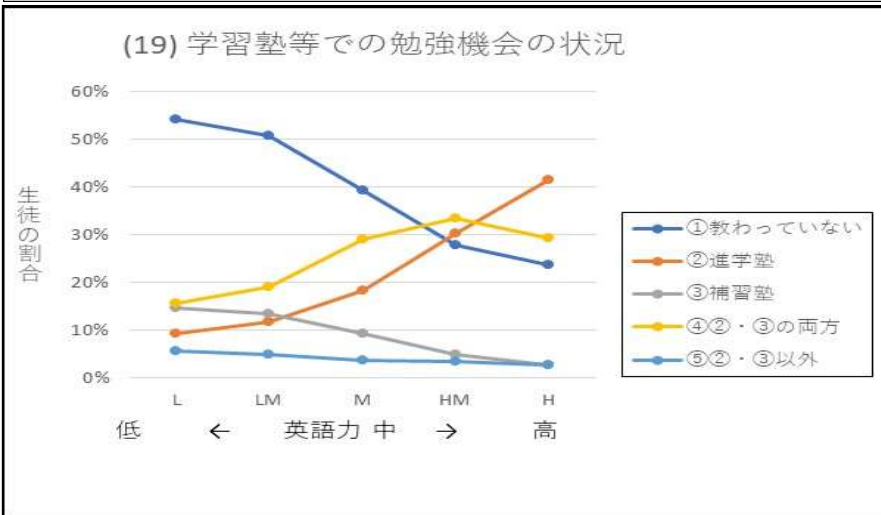
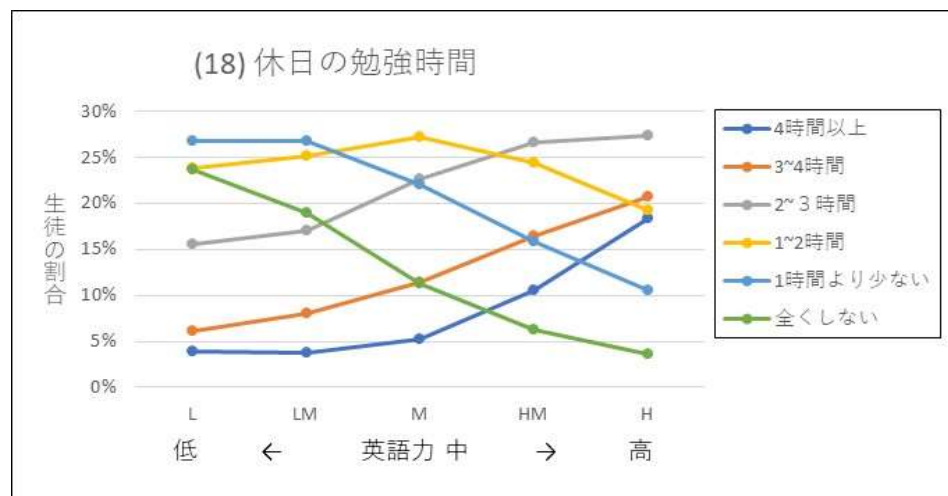
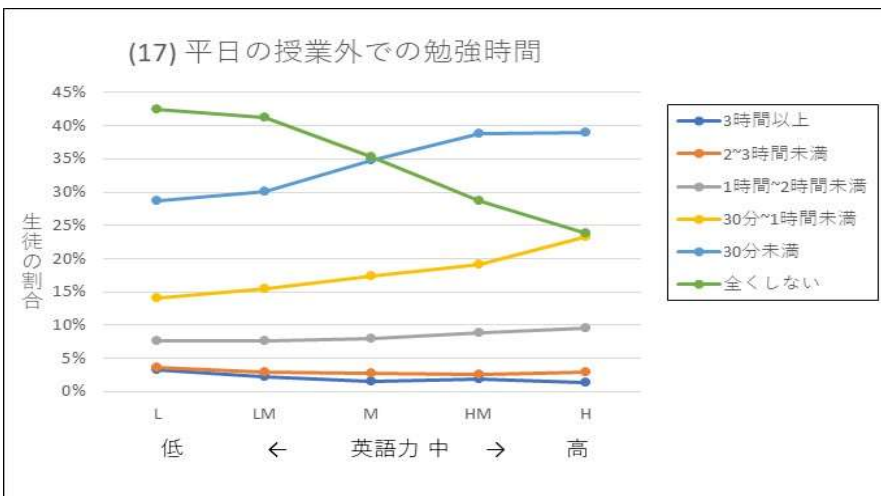
- ・英語5領域の言語活動と英語力との間には、相関が見られる。
- ・「聞くこと」「読むこと」はやや高い層以上で「当てはまる」の選択率が高い。「話すこと(発表)」「書くこと」は中程度以上で「当てはまる」と多くが回答。
- ・「話すこと(やり取り)」は他の活動よりは「当てはまる」の選択率がやや低い。
- ・どの英語力層でも「当てはまらない」の選択率は10%以下と低い。

7.2 英語力と諸変数との関係：英語学習への興味・関心や授業の理解度等



- ・英語の勉強が好き：英語力低群と高群で生徒の割合が逆転している。
- ・英語の勉強は大切：どの英語力層でも「当てはまる」が最も高いが、英語力が高くなるにつれ、「当てはまる」が増える。
- ・英語の授業内容はよく分かる：中程度(M)を境に逆転現象が見られる。英語力がやや高い層以上で「当てはまる」が高い。英語力低層では「当てはまる」は10%程度で最も低い。
- ・英語は将来、役に立つ：どの英語力層でも「当てはまる」が高い。英語力とともに高まる。
- ・将来、積極的に英語使用したい：英語力高層で「当てはまる」の割合が最も高い。
- ・日常的に英語を使う機会：「当てはまらない」の割合が、英語力高層を除いて最も高い。
- ・家庭学習の課題でのICT使用：どの英語力層でも「行っていない」が最も高い。英語力が高くなるにつれ、わずかではあるが家庭学習でのICT機器使用が増加している。

7.3 英語力と諸変数との関係：授業外での勉強時間や学習機会、SES



- ・授業外での勉強時間と英語力との間には関連が見られる。平日は30分未満が最も多く、英語力層の違いはあまりみられないが、英語力が上がるにつれ、「全く勉強をしない」生徒の割合が減少している。英語力高群の休日の勉強時間は、他の群より長い。
- ・英語力が上がるにつれ、進学塾で勉強する割合が増加、英語力が低いほど学習塾等での勉強機会のない生徒の割合が高い。
- ・家庭の蔵書数は、「26~100冊」がどの英語力層でも高い。英語力が上がるにつれて「101冊以上」が高まる。
- ・10冊未満の割合は英語力低群で最も高く27%、英語力が高くなるにつれてその割合は顕著に減少、英語力高群では5%である。

7.4 英語力と諸変数との関係: 英語力の予測要因(学習方法)

モデル	R	R2 乗	調整済 み R2 乗	R2 乗変 化量	有意確率 F 変化量	赤池情報基 準	Schwarz の ベイズ基準
1	.758	.575	.575	.575	0	143984.4	144113.4
2	.759	.576	.575	.001	0	143921.5	144059.0
3	.776	.603	.602	.027	0	141314.5	141512.2

	非標準化係数B	標準誤 差	標準化係数β	t 値	有意確率
(定数)	26.862	0.200		134.062	0
学校規模大ダミー	-0.163	0.076	-0.008	-2.150	0.032
学校規模中ダミー	-0.023	0.071	-0.001	-0.330	0.742
大都市ダミー	1.182	0.124	0.055	9.526	0
中核市ダミー	0.831	0.125	0.037	6.664	0
その他の市ダミー	0.437	0.116	0.023	3.768	0
男ダミー	0.014	0.061	0.001	0.222	0.824
国立ダミー	3.468	0.282	0.040	12.318	0
私立ダミー	2.589	0.247	0.033	10.501	0
進学塾ダミー	2.548	0.083	0.111	30.802	0
補習塾ダミー	0.297	0.108	0.009	2.746	0.006
総合塾ダミー	1.395	0.075	0.067	18.575	0
その他塾ダミー	1.145	0.153	0.024	7.504	0
正答率_国	0.089	0.002	0.212	45.486	0
正答率_数	0.181	0.002	0.507	110.253	0
SES	0.104	0.023	0.015	4.607	0
英_聞_概要要点	0.172	0.063	0.015	2.704	0.007
英_読_概要要点	0.266	0.066	0.023	4.001	0
話_やり取り_即興	0.067	0.038	0.007	1.748	0.081
英_話_発表	0.166	0.042	0.016	3.922	0
英_書_考え気持ち	0.193	0.049	0.017	3.961	0
英_日常的英語使用機会	1.104	0.030	0.127	36.989	0
英_家庭学習ICT活用	0.238	0.021	0.039	11.405	0

- ・統制変数(学校規模、地域規模、性別、国公私、授業外での学習機会、国語と数学の学力)とSESの影響を除いても、言語活動「聞く」「読む」「話す(発表)」「書く」は英語力を有意に予測する。
- ・「英語を読んで概要や要点を捉える活動」、「自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動」、「スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する活動」、「英語を聞いて概要や要点を捉える活動」の順で効果が高い。
- ・SESの影響より、英語の言語活動の効果大きい。
- ・「授業外で日常的に英語を使う機会が十分にある」ことは、授業内の言語活動を上回る効果がある。
- ・授業では5領域の言語活動を行い、授業外では日常的に英語使用の機会と家庭学習でのICT機器の積極的な活用という両輪で、英語力の向上が期待される。

7.5 英語力と諸変数との関係：英語力の予測要因（興味・関心、理解度等）

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	R2 乗変化量	有意確率 F 変化量	赤池情報基準	Schwarz のベイズ基準
1	.758	.575	.574	.575	0	146430.2	146559.4
2	.758	.575	.575	.001	0	146363.5	146501.4
3	.800	.639	.639	.064	0	139712.3	139875.9

	非標準化係数 B	標準誤差	標準化係数 β	t 値	有意確率
(定数)	25.765	0.165		156.257	0
学校規模大ダミー	-0.033	0.071	-0.002	-0.461	0.645
学校規模中ダミー	-0.036	0.067	-0.002	-0.538	0.591
大都市ダミー	1.251	0.117	0.059	10.695	0
中核都市ダミー	0.851	0.118	0.038	7.233	0
その他の市ダミー	0.498	0.109	0.027	4.554	0
男ダミー	-0.142	0.057	-0.008	-2.475	0.013
国立ダミー	3.611	0.265	0.041	13.622	0
私立ダミー	2.610	0.23	0.034	11.35	0
進学塾ダミー	1.948	0.079	0.085	24.784	0
補習塾ダミー	0.209	0.102	0.007	2.056	0.04
総合塾ダミー	1.042	0.071	0.050	14.672	0
その他塾ダミー	1.058	0.144	0.023	7.358	0
正答率_国	0.085	0.002	0.203	46.769	0
正答率_数	0.167	0.002	0.470	107.41	0
生徒 SES	0.220	0.021	0.032	10.363	0
英_好き	0.941	0.036	0.112	26.186	0
英_よく分かる	1.358	0.038	0.145	35.279	0
英_将来英語使用	0.522	0.031	0.060	16.753	0

・統制変数(学校規模、地域規模、性別、国公私、授業外での学習機会、国語と数学の学力)とSESの影響を除いても、英語学習の興味・関心等に関わる変数「英語の授業はよく分かる」「英語の勉強は好きだ」「将来、積極的に英語を使うような生活をしたり、職業に就いたりしたい」は英語力を有意に予測している。

・SESの影響や、地域規模や国公立の違い、授業外での学習機会よりも効果大きい。

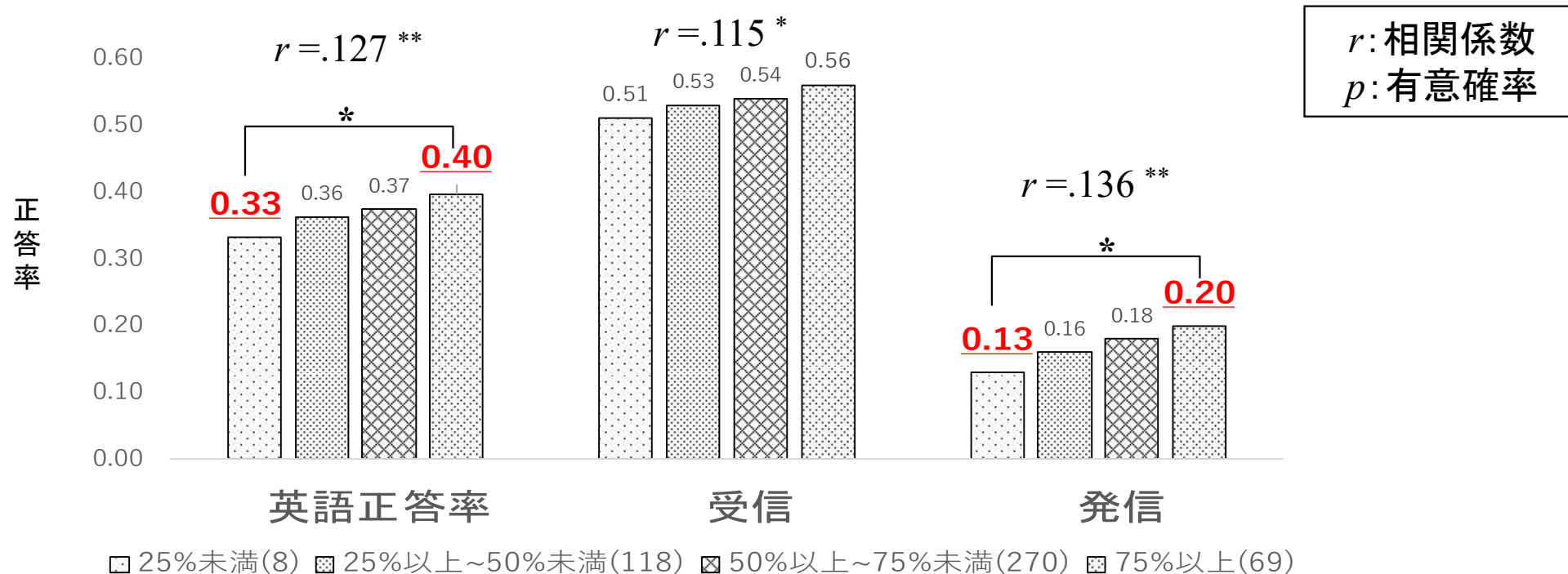
・よく分かる授業を行い、生徒が英語の勉強は好きだと思えるような授業を行い、将来、英語を使った生活や職業が具体的に思い浮かべることができるような工夫を授業の中に取り入れていくことが英語力向上に有効である。

8.1 令和4年度英語教育実施状況調査との関連：言語活動

1) 英語力と「英語での言語活動」

■ 生徒が英語で言語活動をしている時間の占める割合

- 「英語での言語活動」を75%以上している学校は25%未満の学校よりも英語正答率が高く、英語正答率全体が高いというよりは特に発信領域において特に差が見られる



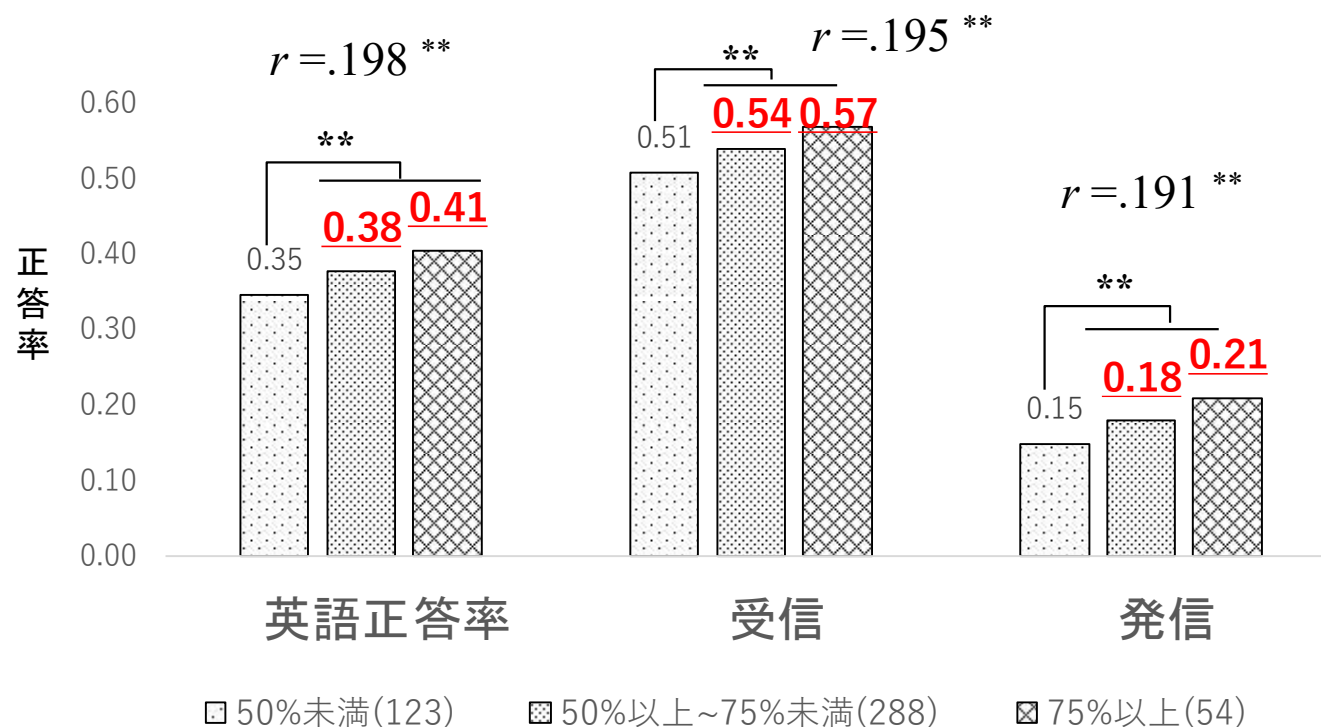
r : 相関係数
 p : 有意確率

※受容: 「聞くこと」と「読むこと」の設問の正答率
 ※発信: 「話すこと」と「書くこと」の設問の正答率
 ※括弧内は学校数を示す

8.2 令和4年度英語教育実施状況調査との関連: 担当教師の発話

2) 英語力と「担当教師の英語による発話」

- 英語担当教師（臨時的任用の者及び非常勤講師を含む）の英語による発話
 - 「担当教師の英語による発話」を50%以上している学校は50%未満の学校よりも英語正答率が高い



r : 相関係数
 p : 有意確率

※受容: 「聞くこと」と「読むこと」の設問の正答率
 ※発信: 「話すこと」と「書くこと」の設問の正答率
 ※括弧内は学校数を示す

9.1 H31中学校英語との比較:生徒が苦手とする問題の特徴

○ 正答率が20%を下回る問題数:H31(4問)、R5(7問)

共通の特徴 ①領域統合型の問題(聞いて話す、読んで書く)である (9問)

②まとまりのある文章を書く問題(2問)

⇒どちらも中学生が苦手としており改善が必要

○ 文法の正確な運用能力を評価する問題の課題:

「過去時制」に関わる問題の正答率が3割以下と他より低い(現在時制や未来表現に関わる問題の正答率より低い。)

5人のうち3~4人の中学生が過去時制の習得に至っていないといえる。文構造の習得は、書くことや話すことの正確な発信において不可欠。基礎基本の定着、そのための長期的な繰り返し、教師の効果的なフィードバックなどの在り方が重要。

○ R5「話すこと」の正答率が非常に低く、無解答率が高い理由(可能性)

- ① 「知識・技能」を評価する問題に、目的場面状況が設定されていて、問題背景が複雑、認知負荷が高まった可能性がある。
- ② 英語で聞いた内容を理解しないと、解答できない問題設定(聞いて話す、は生徒は苦手)
- ③ 「話すこと」にも「書くこと」と同じ採点基準を適用(語や文法等の正確さを評価)は厳しい。
- ④ オンライン音声録音方式への不慣れ
- ⑤ 新型コロナウイルス感染症拡大防止対応で、「話すこと」の指導が困難な時期が2、3年あった。

9.2 H31中学校英語との比較：質問紙調査（共通の質問）

(1) 英語の授業における言語活動の生徒の受け止め（生徒質問紙調査）
⇒統合活動（聞く・読む⇒話す、書く）の回答平均が0.1以上上昇

質問番号		質問内容	令和5年度調査		平成31年度調査	
R5	H31		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
66	60	聞く_概要要点	3.09	0.83	3.09	0.83
67	61	読む_概要要点	3.14	0.81	3.14	0.81
68	62	話す_やり取り_即興	2.82	0.94	2.79	0.95
69	63	話す_発表	3.19	0.88	3.13	0.91
70	64	書く_考え気持ち	3.26	0.81	3.17	0.86
71	65	統合_聞く読む⇒話す	3.21	0.84	3.11	0.89
72	66	統合_聞く読む⇒書く	3.15	0.83	3.03	0.88

(2) 英語学習に対する興味・関心や授業の理解度等（生徒質問紙調査）
⇒「英語の勉強は好き」「将来英語を使いたい」「日常的に英語使用機会ある」の回答平均がH31よりR5が0.1以上低下

質問番号		質問内容	令和5年度調査		平成31年度調査	
R5	H31		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
59	54	英語の勉強は好き	2.56	1.10	2.66	1.10
60	55	英語の勉強は大切	3.47	0.80	3.40	0.86
61	56	英語の授業はよく分かる	2.81	0.98	2.85	0.98
62	57	英語の勉強は将来役立つ	3.47	0.81	3.42	0.86
63	59	将来英語を使いたい	2.23	1.05	2.34	1.08
64	58	日常的に英語使用機会ある	2.01	1.07	2.11	1.10
31	25	外国に興味がある	2.90	1.03	2.81	1.06

(3) 英語の指導法の比較（学校質問紙調査）
⇒すべての質問項目でR5はH31より平均値が上昇

質問番号		質問内容	令和5年度調査		平成31年度調査	
R5	H31		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
49	52	聞く_概要要点	3.33	0.59	3.18	0.64
50	53	読む_概要要点	3.39	0.56	3.25	0.61
51	54	話す_やり取り_即興	3.00	0.70	2.83	0.74
52	55	話す_発表	3.20	0.66	3.09	0.70
53	56	書く_考え気持ち	3.27	0.60	3.17	0.62
54	57	統合_聞く読む⇒話す	2.97	0.74	2.78	0.77
55	58	統合_聞く読む⇒書く	2.94	0.68	2.75	0.72
56	62	ALTとの協力	3.47	0.63	3.44	0.65

注)「当てはまる」を4、「どちらかと言えば、当てはまる」を3、「どちらかと言えば、当てはまらない」を2、「当てはまらない」を1に変換して集計した。

注) 0.1以上の上昇 0.1以上の下落

10.1 マルチレベル分析による、英語力に関連する要因の検討

- 英語力と関連する生徒要因
 - 英語学習に対する興味や価値の認知の高い生徒、日常的に英語を使う機会の多い生徒ほど正答数が多い傾向
- 英語力と関連した教師・学校要因
 - 概要や要点をとらえる活動、即興で伝え合う活動、発表、書く活動などが多く行われている学校に所属している生徒たちは、正答数が多い傾向

例：教師・学校要因と英語力の関連を検討するためのマルチレベルモデル

$$y_{ij} = \gamma_{00} + \gamma_{01}\bar{x}_{.j} + \gamma_{10}x_{ij} + u_{0j} + e_{ij}$$

学校レベルの関連（授業方法の効果）
生徒レベルの関連（授業方法を認知することの効果）

y_{ij} : 学校 j に所属する生徒 i の英語（「聞くこと」「読むこと」「書くこと」）の正答数

x_{ij} : 英語の授業方法に関する質問項目に対する生徒の回答

$\bar{x}_{.j}$: 英語の授業方法に関する質問項目に対する生徒の回答結果の学校平均値

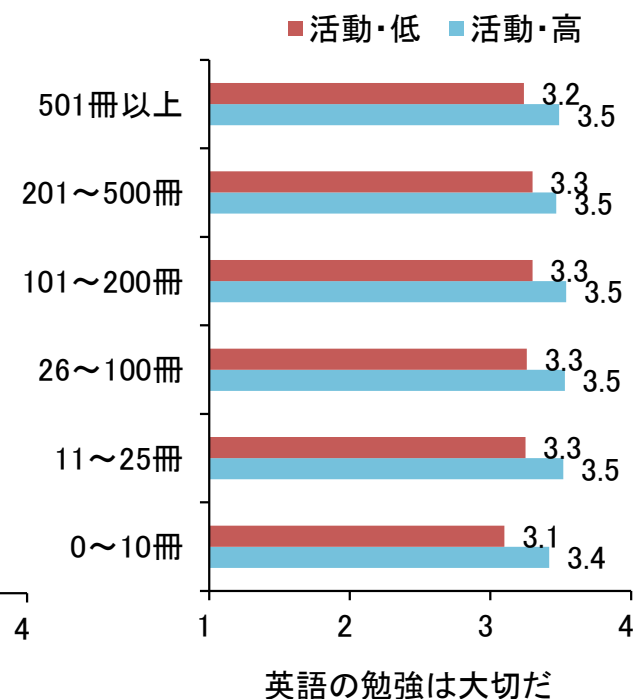
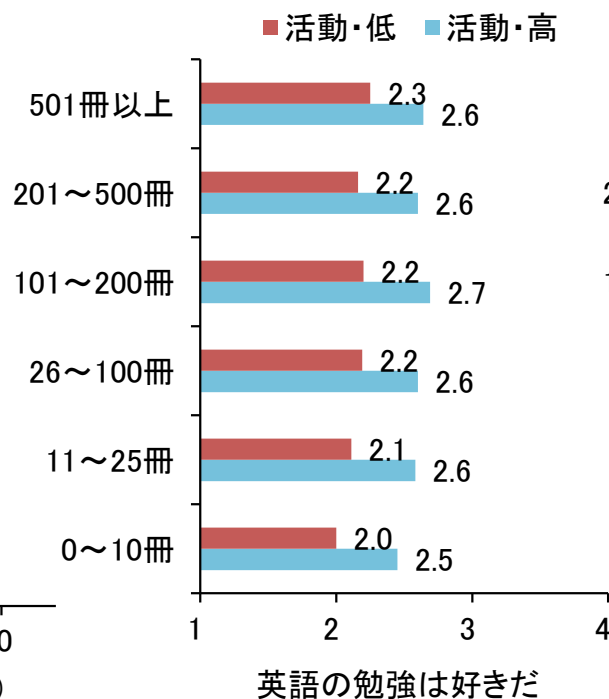
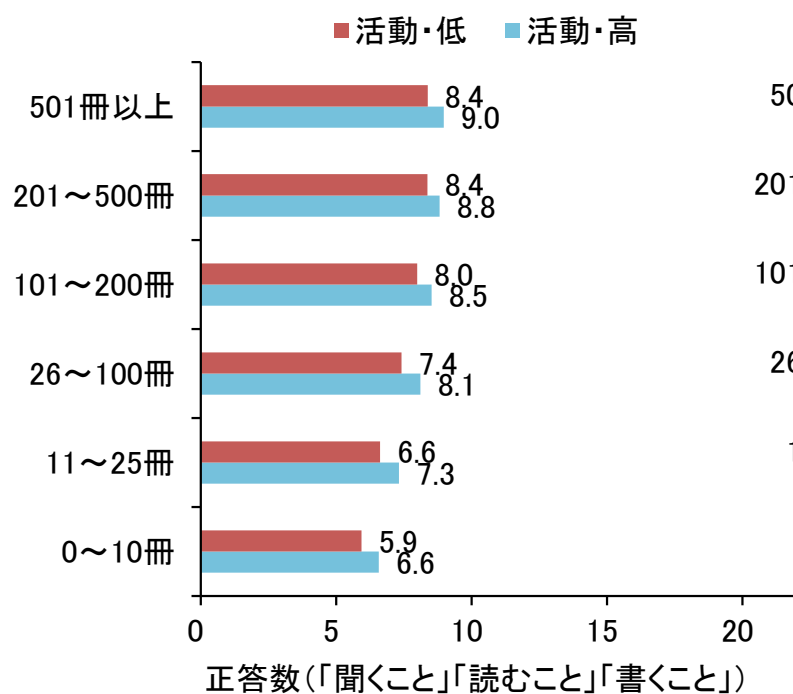
注) 生徒の性別と学校種、学習塾・家庭教師利用、学習時間、家庭の蔵書数、国語と数学の正答数を生徒レベルの統制変数、蔵書数と国語の正答数、数学の正答数の学校平均値、就学援助率を学校レベルの統制変数とした。

10.2 英語の授業方法の効果

概要や要点をとらえる活動、即興で伝え合う活動、発表、書く活動などが多く行われている学校に所属している生徒たちは、英語力や学習意欲が高い傾向

例:「英語を聞いて概要や要点をとらえる活動」の効果

家にある本の冊数に関係なく、概要や要点をとらえる活動が多く行われていた学校に所属する生徒は、英語の正答数が多く、英語の勉強を好きだと思い、大切だと考える傾向



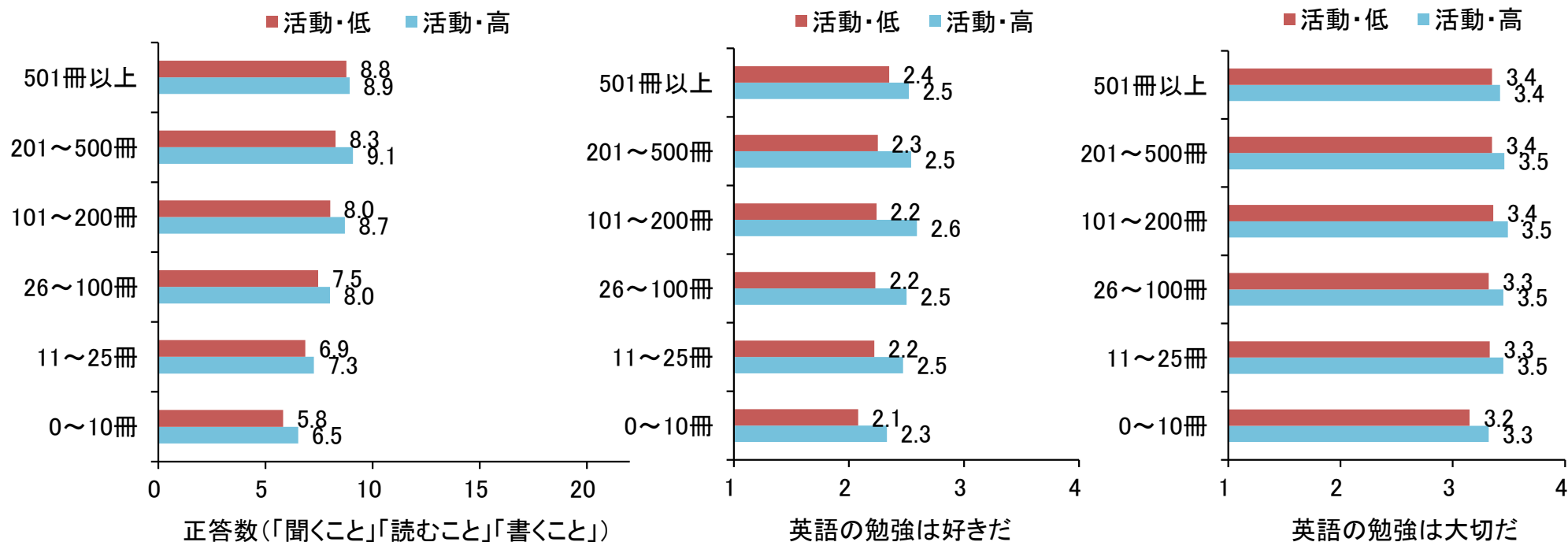
注)「英語を聞いて概要や要点をとらえる活動が行われていたと思う」の学校平均値が「平均値+1標準偏差」より高い学校を活動高群、「平均値-1標準偏差」より低い学校を活動低群とした。分析対象は、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」を当日(4月18日)に受験し、解答者数が20名以上の公立中学校のうち、国語と数学の正答数の学校平均値がいずれも「平均値±0.5標準偏差」の学校に所属し、通塾していない生徒。

10.3 英語の授業方法の効果

概要や要点をとらえる活動、即興で伝え合う活動、発表、書く活動などが多く行われている学校に所属している生徒たちは、英語力や学習意欲が高い傾向

例:「即興で自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動」の効果

家にある本の冊数に関係なく、即興で自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動が多く行われていた学校に所属する生徒は、英語の正答数が多く、英語の勉強を好きだと思い、大切だと考える傾向



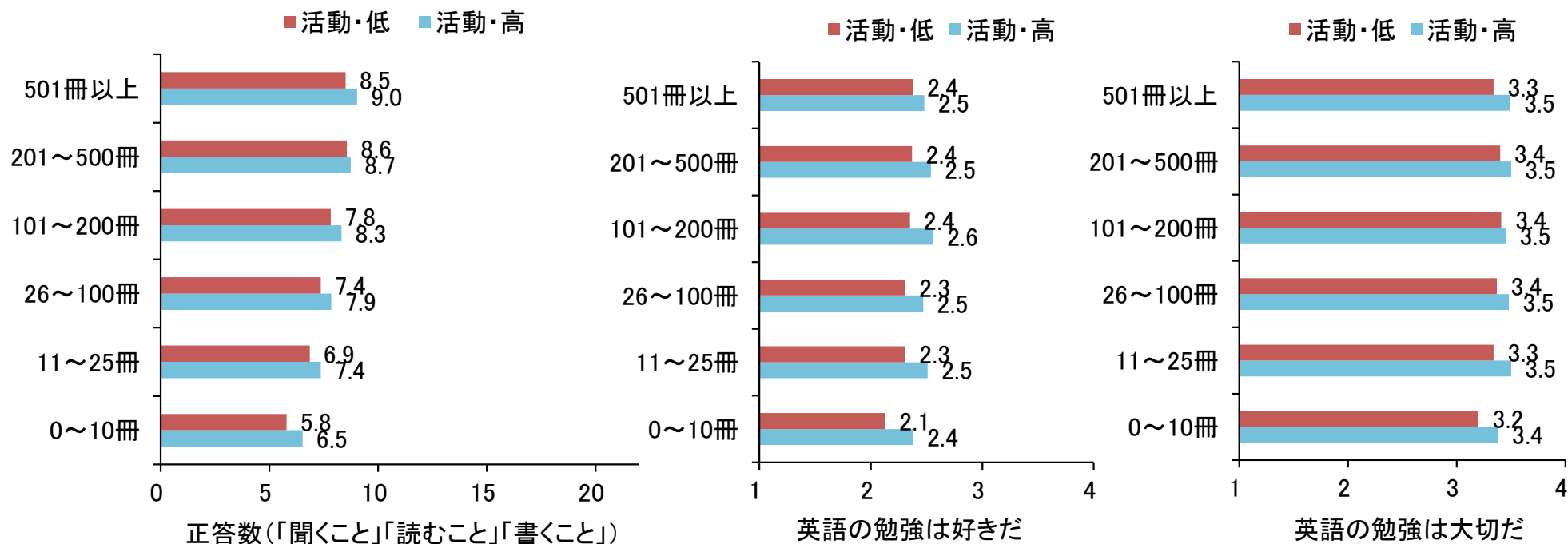
注)「原稿などの準備をすることなく、(即興で)自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動が行われていたと思う」の学校平均値が「平均値+1標準偏差」より高い学校を活動高群、「平均値-1標準偏差」より低い学校を活動低群とした。分析対象は、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」を当日(4月18日)に受験し、解答者数が20名以上の公立中学校のうち、国語と数学の正答数の学校平均値がいずれも「平均値±0.5標準偏差」の学校に所属し、通塾していない生徒。

10.4 英語の授業方法の効果

概要や要点をとらえる活動、即興で伝え合う活動、発表、書く活動などが多く行われている学校に所属している生徒たちは、英語力や学習意欲が高い傾向

例:「スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する活動」の効果

家にある本の冊数に関係なく、英語で発表する活動が多く行われていた学校に所属する生徒は、英語の正答数が多く、英語の勉強を好きだと思い、大切だと考える傾向



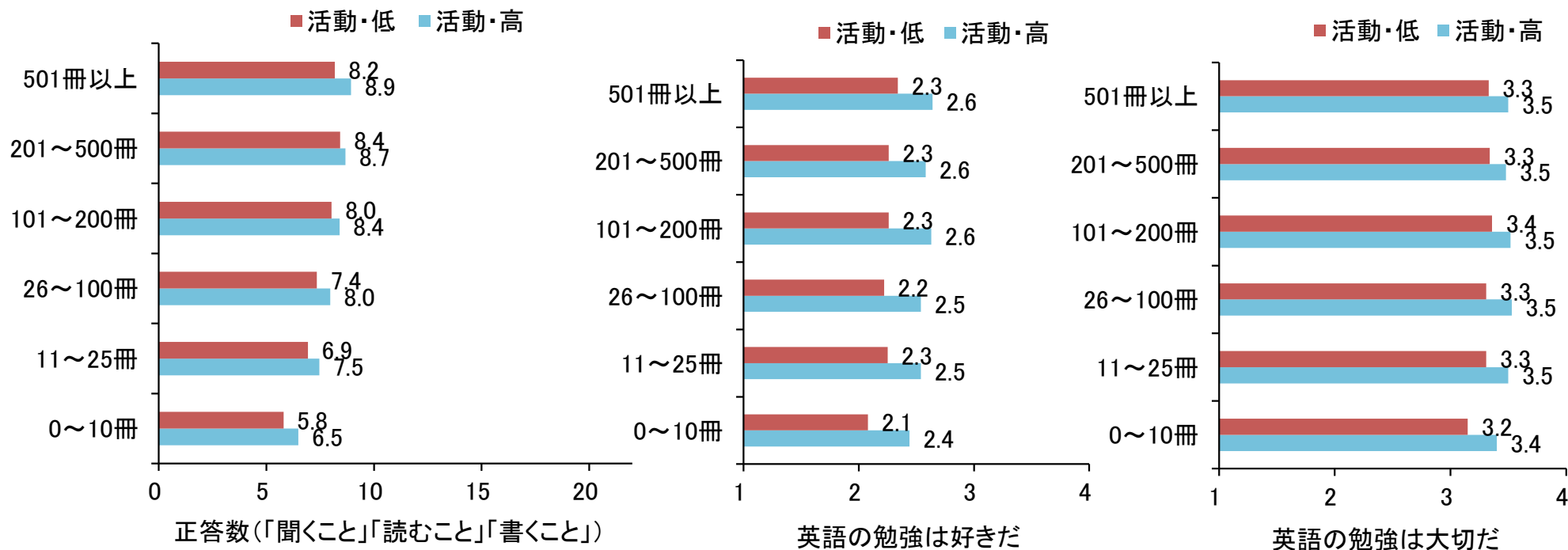
注)「スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する活動」の学校平均値が「平均値+1標準偏差」より高い学校を活動高群、「平均値-1標準偏差」より低い学校を活動低群とした。分析対象は、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」を当日(4月18日)に受験し、解答者数が20名以上の公立中学校のうち、国語と数学の正答数の学校平均値がいずれも「平均値±0.5標準偏差」の学校に所属し、通塾していない生徒。

10.5 英語の授業方法の効果

概要や要点をとらえる活動、即興で伝え合う活動、発表、書く活動などが多く行われている学校に所属している生徒たちは、英語力や学習意欲が高い傾向

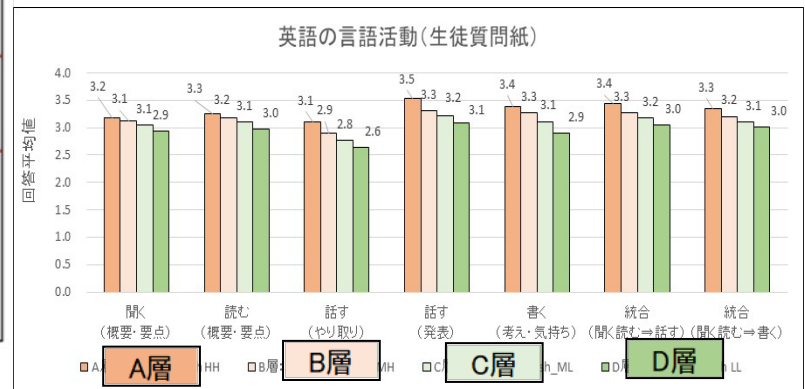
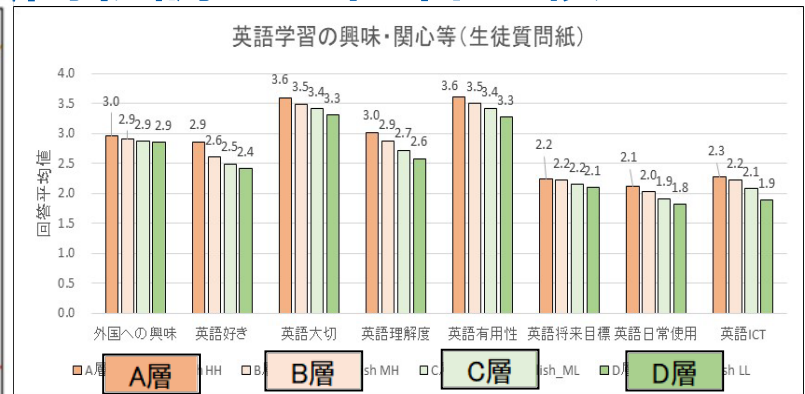
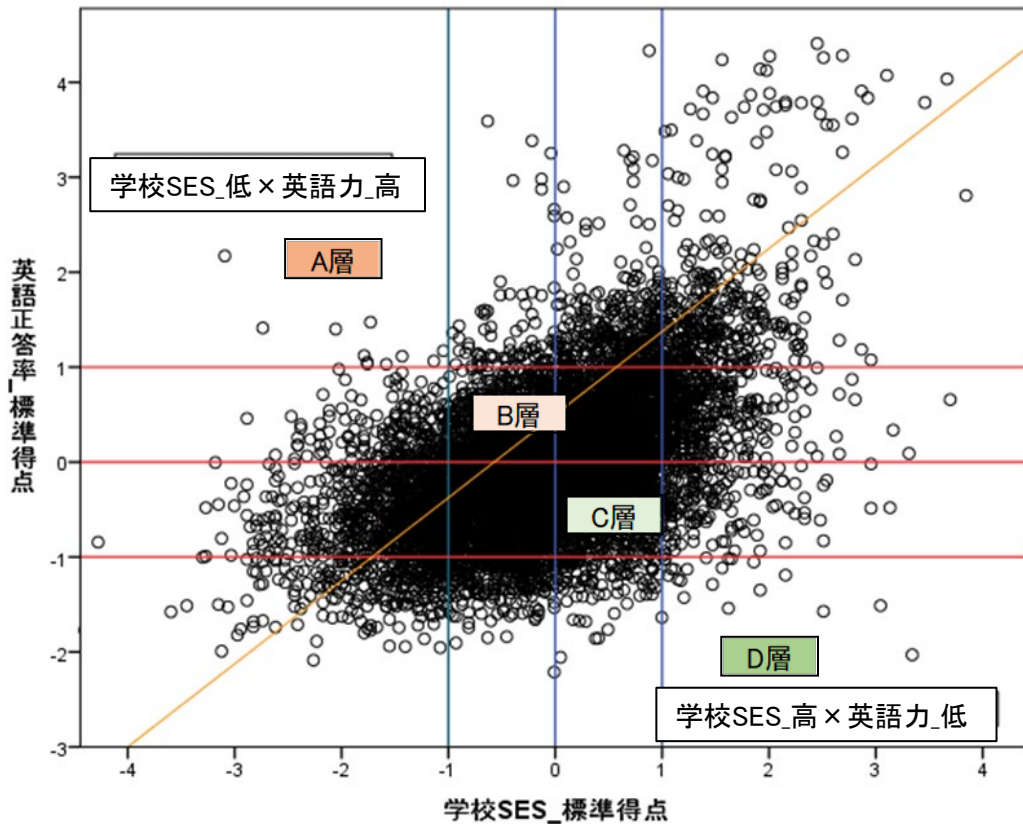
例:「自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動」の効果

家にある本の冊数に関係なく、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が多く行われていた学校に所属する生徒は、英語の正答数が多く、英語の勉強を好きだと思い、大切だと考える傾向



注)「自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が行われていたと思う」の学校平均値が「平均値+1標準偏差」より高い学校を活動高群、「平均値-1標準偏差」より低い学校を活動低群とした。分析対象は、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」を当日(4月18日)に受験し、解答者数が20名以上の公立中学校のうち、国語と数学の正答数の学校平均値がいずれも「平均値±0.5標準偏差」の学校に所属し、通塾していない生徒。

11.1 学校SESと英語力との関係、質問紙調査の回答比較



学校数	英語力_高	英語力_やや高	英語力_やや低	英語力_低
	学校SES_低	A層:12	171	678
学校SES_やや低	84	B層:759	1485	442
学校SES_やや高	339	1238	C層:1144	170
学校SES_高	395	357	183	D層:31

- ・公立中学校(中等教育学校を除く)7,891校を分析の対象。
- ・家庭の蔵書数を学校ごとに平均値を求め、学校SESの指標にした。
- ・A層(SES低×英語力高)、B層(SESやや低×英語力やや高)、C層(SESやや高×英語力やや低)、D層(SES高×英語力低)を比較。
- ・英語学習の興味・関心や理解度等、英語の言語活動の状況に関するどの質問項目も、A層>D層。英語授業の効果や英語学習への興味・関心等は、SESの影響を上回っている。

11.2 訪問調査:学校(6校)(1)

A層:学校SES(低)×英語力(高)12校のうち、「話すこと」の得点が高い順に6校を訪問調査を実施

○ 学校の雰囲気

- ・ 学校は落ち着いている。校訓や学校教育目標が自然な形で生活の中に根付いている。
- ・ 学校のすみずみまでよく整理整頓されている。掲示物がきれい。
- ・ ウェブサイトや学校通信などで、生徒の様子が保護者や社会に生き生きと伝えられている。
- ・ 生徒は授業に集中できる環境にある。生徒は礼儀正しい。挨拶ができる。
- ・ 学校長のリーダーシップの下、教員集団が同じ方向を向いて、学力向上に取り組んでいる。
- ・ 学校長は、教員の指導力に全幅の信頼を置いている。サポート体制が充実。

○ 英語科の授業

- ・ 自分の気持ちや考えを伝えられるようになることを授業の目標として、やり取り中心の授業が行われている。
- ・ 対話的な言語活動を軸に、やり取りをしたあと、さらに思考を深める活動が行われている。
- ・ 授業中に無駄な時間がない。先生も生徒もみな、授業に集中できている。
- ・ 授業中に教員の指示がよくゆきわたっている。
- ・ 生徒たちは、英語の言語活動を、真剣に、かつ、楽しそうに行っている。
- ・ 言語活動中心の授業の中で、正確さに焦点をおいた指導が、その時間内に行われている。
- ・ 言語活動の中での、教師のフィードバックのタイミングと内容が適切で効果的である。
- ・ 正確さに焦点を置いた指導を行うときには、ICT機器をうまく活用している。
- ・ 生徒が学力の伸びを実感している。

11.2 訪問調査: 学校(6校)(2)

A層: 学校SES(低) × 英語力(高) 12校のうち、「話すこと」の得点が高い順に6校を訪問調査を実施

○ 英語科の担当教員

- ・ 3年間持ち上がりである。生徒は同じ教師から3年間一貫した英語指導を受けている。
- ・ 話すこと(やり取り)と書くこと(考え・気持ち)の活動を、1年次から継続して実施している。
- ・ 新学習指導要領外国語科の目標と内容をよく理解している。
- ・ 生徒の状況や学習をよく把握している。
- ・ 授業内だけでなく、授業外の課題の出し方を工夫し、家庭学習課題のチェックを頻度高く行っている。
- ・ 英語が苦手な生徒に対して、個別指導を行っている。
- ・ 落ちこぼれを出さない覚悟で指導。学習塾等に頼らない。
- ・ 授業内で力をつけさせる。
- ・ 苦手な生徒が授業中に参画できる場面を必ず作り、自信を持たせている。
- ・ 英語指導についてプロの意識が高い。
- ・ 全国学力学習状況調査、県の学力試験、英語民間試験などの結果を自らの授業評価として受け止め、授業改善に活用している。
- ・ 初任校時代に、モデルとなる英語科教員との出会いがある。
- ・ 継続して研修をしている中で、自分なりの指導法を確立し、手ごたえを感じている。若手教員の場合は、改善の意欲も高い。

訪問校で見つけた廊下の貼り紙



11.3 訪問調査:教育委員会(4件)

自治体独自の英語教育の取組を行い、成果を上げている教育委員会4件の訪問調査を実施

- 自治体で英語教育の具体的な目標を設定している。
- 全国学力・学習状況調査や、英語民間試験、自治体独自の学力試験などの結果をよく分析して、客観的な指標をもとに、英語教育改善の施策を行っている。
- 自治体で独自のカリキュラムを作成し、全ての学校で同一のシラバスで実施しているケースもあり、大きな効果をあげている。
- ALTや外部英語専門家を独自に雇用し、英語教育の底上げ、英語授業での活用、授業改善のための取組を行っている。
- 教員研修の充実、頻繁に研修の機会を設けることで、教員同士の英語授業改善の方向性が具体的なものとなってきている。
- 生徒が学校外で英語を使用する機会を多く設定し、提供している。
- 英語教育向上に、自治体をあげて長期間取り組んでいる。

結論：中学校英語改善への示唆（1）

○「話すこと」「書くこと」の力の育成が課題

- ・自分の考えや意見を書いたり、目的場面状況等が設定された中で、やり取りをしたり、意見と理由を述べたりする英語力がまだ十分に習得されていない。発信技能（話すこと、書くこと）の育成、領域統合型の問題に対応できる英語力の育成が課題である。

○英語力向上に有効な取組等

- ・英語力向上のため、「授業内では言語活動を多く行う」「授業外では日常的に英語を使用する機会を増やす」「家庭学習でICT機器を活用して英語を話したりする練習を行う」ことは効果がある。さらに、「授業の内容がよくわかる」「英語が好きである」「将来の目標として積極的に英語を使用する生活や職業につきたい」ことも、英語力向上に有効である。

○各生徒の英語力に応じた指導が効果的

- ・生徒の英語力を5層に分け、英語でできること(Can-do)を対応づけた。
 - 低：できることはほとんどない
 - やや低：聞くことが徐々にできる
 - 中：聞くことと読むこと(概要、要点)は半分くらい把握できる
 - やや高：聞くことと読むことはでき、正確に書くことはできるが自分の考えを表現するのは難しい
 - 高：聞くこと、読むこと、書くことはでき、話すことも正確ではないが意味は伝えられる
- 各生徒の英語力に応じて適切な指導を行えば、より効果的。

結論：中学校英語改善への示唆(2)

○英語力による「話すこと」「書くこと」の無解答率

- ・英語力が高い層では、「書くこと」より「話すこと」の無解答率が高い。一方、英語力が低い層では、「話すこと」より「書くこと」の無解答率が高い。話す意欲を大事にしつつ、より正確に伝わるような指導が必要である。
- ・間違いを恐れずに、英語で表現をする力を育成するために、言語使用の正確な運用に重点をおいた採点基準から、意味が伝わる言語使用の適切な運用も含めた採点基準にしていくことが、学校英語教育に良い波及効果をもたらすことにつながるであろう。

○社会経済的背景(SES)と英語力の関係

- ・SESが低い場合であっても、言語活動が行われていたり、英語学習の興味・関心や授業の理解度が高かったりする場合は、英語力が高くなっており、SESの影響よりも英語授業の効果等の影響は大きい。

○SESが低く英語力の高い学校の英語授業

- ・訪問調査では、SESが低く英語力の高い学校の英語授業を参観、やり取りを中心とした授業展開が多く、言語活動を中心にしつつ、語彙や文法事項などの正確さに焦点を置いた練習が豊富に行われていた。

結論：中学校英語改善への示唆(3)

○ 平成31年度中学校英語の結果との比較

- ・ 中学生が苦手とする問題は、H31もR5も、領域統合型の問題と、まとまりのある文章を書く問題である。どちらも改善が必要である。
- ・ 5人のうち3～4人の中学生が過去時制の習得に至っていないといえる。文構造の習得は、書くことや話すことの正確な発話において不可欠。言語活動の中で長期的な繰り返し、教師の効果的なフィードバックなどの在り方が重要。

○ 全国学力・学習状況調査の問題の困難度

- ・ 問題の困難度は、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」、「話すこと」の順で上がっている。特に、「話すこと」の問題が、対象者の生徒には難しすぎた。

○ 全国学力・学習状況調査の採点基準

- ・ 「書くこと」と「話すこと」の採点基準が同じで、「コミュニケーションに支障のない程度の正確さ」を文法等で評価しているため、誤答となる割合が高く、誤答の生徒の割合が高すぎて、生徒の英語力の実態が正確にとらえきれない。
- ・ 意味を正しく伝えられていれば部分点を与えるなどの工夫により、誤答と準正答の英語力の差を、もう少し正確に評価できるようになる。